Fool'sParadise

彪峰イツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｏｏｌ' ｓＰａｒａｄｉｓｅ

【Ｎコード】
Ｎ５２２２Ｚ

【作者名】
彪峰イツカ

【あらすじ】
「それでも、俺たちは信じていた。灰色の空の向こうに未来(あす)があることを」
戦争に汚された空の下で紡がれる儚い友情と希望の物語。

※オリジナル創作サイト「Ｎｅｖｅｒ－ｎｅｖｅｒ　Ｌａｎｄ」より転載

PROLOGUE

空はいつものように不機嫌な灰色の目で、地上を睨みつけていた。

「ああ、雨降りそうだな」

ぼんやりと空を見上げ、轢（キシル）はつぶやく。あの戦争からもう随分経っているというのに、未だこの街には死の雨が降り続いているのだった。

轢は足を速める。――今更って感じもするけど、あんまり簡単に死ぬわけにはいかねえし。

死の雨、つまり放射能を含んだ雨は、人体に著しく悪影響を及ぼす。この辺りに住む者たちの寿命が短いのは、この雨と、それを降らせる灰色の空のせいだろう。

「……」

首にかけた十字架のチョーカーを握る。それは轢のくせだった。まるで祈るように、すがるように、ただ握りしめる。その想いに答える神などいないと、既に彼は知っているのに。

手にかけたビニール袋が少し重い。いろいろと買い込み過ぎたせいかもしれない。轢はひとごちた。――まだ、金残ってたっけ。そろそろ次の仕事探した方がいいかもな。

彼ら戦争孤児は、金になることなら何にでも大抵手を染めている。犯罪じみた件もあるにはあるが、構っていられない。

生きたければ――死にたくなければ。

アパートに繋がる裏路地に入って、轢は不意に足を止めた。目に映ったものが信じられず、何度か瞬く。彼と同じくらいの年齢の男がひとり、力なく倒れていた。この辺りには珍しい金髪で、服はどろどろに汚れている。真っ白な顔には、切り傷や打撲傷が幾つかあった。

何となく素通りするのも寝覚めが悪いように思えて、彼は身を屈めてその青年の肩を揺さぶった。
「おい、大丈夫か？」
服が汚れるのも躊躇せず、轢は彼を抱き起こした。荒々しい世間を潜り抜けて生きてきたにも関わらず、自分にはどうもお人好過ぎるところがある――自分でも分かっているのだが、それはそれで、そういう自分が嫌いではない。
「もしもーし、生きてる？」
ぐったりとした体はなされるがままに揺れ動く。肌はひんやりと冷たいが、薄く開いた唇はわずかに動いている。呼吸はしているらしい。
「一応生きてはいるみたいだけど……どうしよっかな」
考える轢の頬に、ぽつんと冷たい滴が落ちた。振り仰ぐと、先ほどよりも黒く染まった空の色が視界に飛び込んでくる。
「いよいよ降って来たか……」
轢は俯いて男を見つめ、悩むような素振りをみせた。だが、実のところ答えは既に出ている。
「……よし」
一つ頷くと男の腕を自分の肩に回し、抱えるように立たせる。意識の戻らない彼を、引き摺るように歩かせた。
轢が部屋に着く頃には、空は本格的に泣き出していた。

RAIN

雨が振り出してから一時間。雨音は激しさを増し、世界を重く塗り潰していた。
轢は青年を自分のベッドに寝かせ、自分は脇の椅子に座ってぼんやりと窓の外を見ている。何となく雨粒が灰色がかっているように見えるのは、気のせいだろうか。けれどこんなに暗い空なのだから、灰色の雨を降らせてもおかしくない……そう思う。
――ギシ、とベッドが鳴った。振り向くと、男が眼を開けて起き上がっている。
「気がついたか？」
声を掛け、眼が合って――轢は息を飲んだ。

閉ざされていた瞼の下にあったのは、
目が覚めるほど鮮やかで、
それでいて深く澄んだ青。
見たこともない色彩。
なのに……、
何故こんなに、懐かしいんだろう？

「……」
黙って瞬きを繰り返している青年に、轢は当惑を振り払って問い掛けた。
「大丈夫か？」
「……え？」
少年じみた、澄んだ高い声が聞き返す。彼はきょとん、と首を傾げていた。
「お前、道端に倒れていただろ」
「僕が……ミチバタに？」

「そう。雨も降りそうだったし、ほっとけなくて拾って来ちゃったんだけど……」
「……」
青年はぼうっとしたまま轢を見つめている。まだあまり意識がはっきりしていないのだろうか。轢はため息をひとつついた。――ただの行き倒れかと思っていたが、これは意外にやっかいな拾い物かもしれない。
「俺は轢。お前の名前は？」
「……Ａｚｕｒｅ（アズーリ）」
「あ、アズーリ？」
変わった名前だな、と思いながら、轢は次の質問を口にした。
「それで、Ａｚｕｒｅ。お前、どこから来たんだ？　見たところ、この辺りに住んでる人間じゃなさそうだし」
こんな目立つ容姿をした人物が近所にいれば、轢にも何となく見覚えくらいはあるだろう。彼はこの街に住んで長い。
青年は少し口をつぐんで下を向き、やがて首を横に振った。
「……覚えてない」
「え？」
「わからない。覚えてない……」
「名前は分かったんだろ？　じゃあ、何で他のことは覚えてないんだよ？」
「……」
無言で俯くＡｚｕｒｅに、轢はやれやれと肩をすくめた。彼は嘘をついているようにも見えないから、きっと本当に覚えていないのだろう。それなら、これ以上問い詰めて困惑させても仕方がない。事情は人それぞれ、いろいろあるものだ。下町に生きてきた彼はそれをよく知っている。
「もういいよ、飯にしよう。お前も何か食うか？」
ベッドに座るＡｚｕｒｅに、轢は先ほどの買い物の中からハンバーガーを取り出して渡した。

「……ありがと」
轢は自分も同じものを口に運びながら、Ａｚｕｒｅと名乗った男を横目で観察した。眠っていたときよりも今の方が少し幼く見えるのは、目がぱっちりと大きく、そして青く澄んで輝いているせいかもしれない。元は白だったのかもしれない、汚れたグレイのシャツ。黒いジーンズもあちこちが擦り切れ、その右ポケットは妙に膨らんでいた。何か入っているのだろうか。無遠慮に見つめていた轢の視線に気づいたのか、Ａｚｕｒｅはパンを持ち替えて右手をポケットに突っ込んだ。彼が無造作に引っ張り出したのは――。
「げえっ？！」
彼が手にしていたのは高額紙幣の束だった。轢の驚愕をよそに、Ａｚｕｒｅは首をひねる。
「これ、何？」
「いや何って……知らないのか？！」
当惑もあらわに轢は聞き返した。Ａｚｕｒｅはただ首を横に振るだけだ。Ａｚｕｒｅにはああ言ったものの、彼自身もそれほど多額の金銭をこれまで見たことがない。一瞬強盗かとも思ったが、この反応ではあり得ないだろう。もしそうだとしたら、あまりにも間抜けすぎる。
「それ、お前のか？」
尋ねるが、Ａｚｕｒｅは首を横に振る。
「知らない」
「……あんまり人に見せんなよ。奪られるぞ」
Ａｚｕｒｅは札束をまじまじと眺めていたが、やがてそれを轢の目の前に突き出した。
「な、何だ？」
Ａｚｕｒｅはふわりと微笑む。
「あげる」
「……は？」
「あげる。僕を助けてくれたから、お礼に」

轢は苦笑し、札束を掴む彼の手を押しのけた。
「……ばか。貸しベッド代と飯代にしちゃあ、全然釣り合ってねえだろ？」
「でも、僕要らないから……」
「これから要るようになるって。これ使って何でも買えるんだからな」
――これから、と言って気がつく。
「お前、どうするんだ。行くあてあるのか？」
尋ねると、Ａｚｕｒｅは目を伏せて首を横に振った。
「ううん。何にも……わからないし……」
「お前……」
まるで捨て犬のようにしょげるＡｚｕｒｅの肩に手を置こうとした、その時。
ドンドンドンドン！！　大きな音をたて、ドアが乱暴にノックされた。
「……誰だ？」
心当たりのない轢はつぶやきながら、玄関に向かう。覗き穴に目をあてると、体格のよいスーツ姿の男が数人こちらを伺っていた。
「……？」
轢は眉をしかめた。――嫌な予感がする。ドアのチェーンをかけ、鍵を閉めたまま轢は外に声を掛けた。
「誰だ？」
「人を探している」
正面にいる背の高い男が、一歩進み出た。
「人？　どんなやつだ？」
まさかＡｚｕｒｅのことではないだろうな、と轢は警戒を強める。
男はすぐさま答えを返した。
「金髪の、青い目をした男だ」
「……」
――ビンゴかよ。轢は舌打ちしたくなった。

「お前がここに連れて帰ってくるのを見たと聞いたぞ。渡してもらおう」
「……」
背後に立つＡｚｕｒｅをちらりと見遣る。彼は不安げにも見える無表情で、首を横に振った。知らない、と言いたいのだろう。轢自身も、男たちにはいい感じを受けなかった。高価そうなスーツを着込んでいるから、という理由ではない。確かに金持ちは下町で反感を買いやすいが、それ以前に男からは何となく嫌な雰囲気が漂っていた。人と人とも思っていないような、そんな不遜さが。
「あー……」
轢は一瞬逡巡した後、きっぱりと答えた。
「知らねえな」
「とぼけるな。知らないというなら中を見せてもらおうか」
「いや、俺知らない人をいきなりうちに入れるほど警戒心薄くないわ。ごめんな」
轢と男を隔てる薄いドアでは、たいして防護壁の役には立たない。向こうがそのつもりなら、すぐに突破されてしまうだろう。
轢はＡｚｕｒｅに窓を開けさせる。すぐに、冷たい雨が部屋に降り込んできた。この部屋は二階だし、天井の低い安アパートだから地面まで大した高さはない。飛び降りたところでせいぜい捻挫するくらいですむだろう。先程買い込んだ荷物と、Ａｚｕｒｅが手にしたままだった紙幣を受け取り抱え込む。
「轢？」
Ａｚｕｒｅは小さな声で不安そうに彼を呼んだ。
「何してるんだ、逃げるんだよ」
耳打ちして、轢はＡｚｕｒｅに窓から飛び下りるようにと指で指し示した。
「俺もすぐ行くから」
「……うん」
一瞬の躊躇の後に頷き、Ａｚｕｒｅが身を翻す。

「おい、開けろ。開けないか！」
ドアが乱暴に叩かれ始めた。ガタガタと音を立てている。
「ちょっと待てって、ドア壊れるぞ！　壊れたら弁償してもらうからな！！」
轢は怒鳴り返すと、窓から軽く身を躍らせた。膝のばねを利かせて着地する。
「轢！」
Ａｚｕｒｅは足をくじきもせずに轢を待っていた。その腕を引っ張って、轢はすぐに走り出す。その直後に、鍵を撃ち抜いたのか、辺りに拳銃の音が響いた。
「……逃げられたか」
踏み込んだ部屋が無人であることに気づいて舌打ちをし、彼らは開いたままの窓に駆け寄る。その時には、Ａｚｕｒｅと轢は既に雨の路地角を曲がって姿を消していた。

BELIEVE

かなりの距離を走った後、彼らはとある廃ビルの軒先で足を止めた。雨はいっそう強く降り続いている。轢は辺りを注意深く見回すが、誰かがあとを尾けて来ているような気配はない。ほっと息をつき、髪をぬぐった。

「びしょびしょに濡れちまったな」

轢は眉をひそめる。既に体の芯まで冷え切っていた。

「どうしようかな。さすがに服は持ち出せなかったし……着替え買わねえと」

同じくひどく濡れているＡｚｕｒｅを見遣り、付け加える。

「それから、お前用の変装道具もな」

Ａｚｕｒｅの眼は人目につきすぎる。そう思った。彼を探す追っ手から逃げるのなら、それくらいの準備は必要だろう。その鮮やかな瞳を曇らせて、Ａｚｕｒｅはうつむく。

「……ごめんね」

「あ？」

「僕、轢に迷惑かけて……」

「何言ってんだよ」

軽く受け流すが、Ａｚｕｒｅの顔は冴えない。

「……」

言葉に困った轢は、体を硬くして立ち尽くすＡｚｕｒｅの手を無理やり引っ張り、再び雨の中を歩き始めた。

「轢？」

「困ったときは下町の有名人に頼るのが一番なんだよ」

「ユウメイ……？」

「この辺のやつらに仕事の斡旋してるやつでさ。顔も広いし、あそこだったら服だけじゃなくていろんなものが調達できるし……住む場所も探さなきゃなんねーし、足の着かない仕事も欲しいし。いろ

いろ便利な奴なんだ」
「ふうん？」
怪訝な顔をしながらも素直についてくるＡｚｕｒｅを連れ、路地を何度も曲がる。周りを用心深く確認してから滑り込んだのは、一見下町にはよくある普通の雑貨店だった。
「いらっしゃい」
二人を出迎えたのはこの店の主人、マオ。詰襟の服を着て丸い眼鏡をかけた、年齢不詳の男だ。長い黒髪を三つ編みにして背中に垂らしている。轢の顔を見ると、親しげに声を掛けてきた。
「久々だな、轢。例の仕事はうまく片付けたか？」
「それどころじゃねえんだよ」
轢はドアを後ろ手に閉め、
「タオルタオル、あととにかく着替えくれ」
くしゃみを堪えて早口にそう言った。
「雨の中を走ってきたのか？　馬鹿だなあ」
ため息と共に投げられたタオルで体を拭きながら、轢は言い訳がましく口を開く。
「変なのに追われてんだよ」
「変なの？」
マオは轢の言葉を繰り返してから、ふと気付いたようにＡｚｕｒｅに視線を固定した。その瞳の色に、マオは轢と同様の衝撃を受けたらしい。軽く咳払いをして、轢に尋ねた。
「その……男は？」
「あー、道端に倒れていたのを俺が拾ったんだけどさ」
轢は曖昧に答える。
「うん」
「名前以外の記憶がないんだって」
「……追われているのは彼なのか？」
「まあ、どうやらそうらしい」
「で、お前まで逃げてきたのは何故だ？」

「いや、なんかほっとけなかったし……」
タオルに髪を包み、天井を仰ぐ轢。その答えを聞き、マオは苦笑した。
「轢はお人好しだからなあ……」
「ところで、さ」
轢は顔をひきしめ、居住まいを正す。
「ちょっと今の家には戻れそうにないんだ。どこか紹介してくれないか？」
「ストックなら何部屋かあるが、金はあるのか？　貸してやってもいいぞ。もちろん後で取り立てるが」
「金は持ち出してきた……っていうか、こいつが持ってる」
実際のところ、ひとまずはＡｚｕｒｅの持っていた金をあてにするしかない。マオは軽く顎をつまんだ。
「あまり一ヶ所にとどまっていない方が良いと思う。どうせなら安宿を点々としたほうが安全かもな」
「そうだなあ。しつこくない奴らだといいんだけど」
Ａｚｕｒｅは二人の会話を聞いているのか聞いていないのか、店の中をきょろきょろと見まわしている。店に積み上げられているのはごく普通の雑貨類だった。一般の客に見られてまずいようなものは表に出していないのだ。
「時々様子見に来させてくれよな。やつらの情報も欲しいし」
轢の言葉に、マオは頷く。
「俺も気にしておくよ。何か金になる事件が裏にあるのかもしれないからな」
轢はそのマオらしい言葉に苦笑した。
「で、服をくれよ」
「分かった。彼の分もだな？」
「頼むよ。サイズは適当でいい」
「そうだな。ちょっと待ってろ」
マオは頷き、その辺りからシャツとジーンズ、上着を取り出して

台の上に置く。その横に、傘。
「あと、これも」
何か言おうと口を開けた轢の目の前にマオが並べたのは、濃い色のサングラスと厚いニット帽だった。
「……」
轢が視線で問うと、マオは頷いてみせる。
「目立つだろう？」
と丸眼鏡の奥の自分の眼と髪を指差し、続いてＡｚｕｒｅに視線を投げた。
「彼の名前は？」
答えたのは轢ではなかった。
「Ａｚｕｒｅ」
名乗って微笑むＡｚｕｒｅに、マオは頷く。
「Ａｚｕｒｅ、か。……いい名前だ」
「いくら払えばいい？」
「そうだな……」
マオの言う金額を聞き、轢はＡｚｕｒｅに声を掛ける。
「悪いけど、お前のアレ。ちょっとだけ使っていいかな」
「アレ？」
「ほら、さっき見せてくれたやつだよ」
「ああ……タイキン？」
「そう。それ」
「いいよ。あげる」
「いや、そんな全部要らないから」
Ａｚｕｒｅが無造作に取り出した札束の中から、轢は一枚抜き出した。
「釣りはちゃんとくれよな？」
「おい、何だそれは？！」
マオは轢の差し出す紙幣には見向きもせず、Ａｚｕｒｅの手の中の札束を眼を見張って見つめている。

「Ａｚｕｒｅが持ってたんだよ。……あ、別に盗んできたわけじゃないって。誤解すんなよ」
「お前はともかく、Ａｚｕｒｅは記憶がないんだろう？」
「まあ、そうなんだけどさ……」
マオが横目で窺うと、Ａｚｕｒｅは澄んだ眼で轢を見ていた。親に頼りきる子供のように寄る辺なく、それでいて安心しきった瞳。轢に対する信頼の現われだろうか。この分なら、Ａｚｕｒｅが轢に害をなすことはきっとないだろう。それでも、マオは警告せずにはいられなかった。
「人を信じるのも大概にして置けよ。……今更かもしれんが」
「そうだな」
轢は軽く頷いて紙袋に服を詰め、Ａｚｕｒｅの肩を叩いた。
「行くぞ、Ａｚｕｒｅ」
「うん」
Ａｚｕｒｅは轢に従って歩き出す。
「おい」
その背後から、マオは声を掛けた。
「もし俺が追っ手にお前らの居場所を売ったら、どうするんだ？」
「……」
轢は黙って振り返る。そして、穏やかな微笑を浮かべた。
「うん。仕方ないよな。お前も生きていかなきゃならないんだし」
「……」
絶句したマオをよそに、轢は淡々と続ける。
「そんなことになったら多分恨むと思うけど……でも、それはどうしようもないことだから。俺は今のところお前を信じてる。もしお前が裏切ったとしても、それはお前を信じた俺の責任だよ」
朗らかな轢の表情をじっと見ていたマオは、やがて苦笑いを浮かべた。
「そうか。……せいぜい、お前の信頼を裏切らないようにするよ」
「おう、頼りにしてるぜ」

マオはゆるく腕を組み、彼の背中を見送った。ため息とともにつぶやく。

「轢には勝てないな」

古い顔馴染みの中でも、一番気を許せる相手。彼はこの下町に生きながら、決して汚れきってしまうことのない魂の持ち主だ。

しかし、あの青年は一体何なんだろう……？　胸騒ぎがする。長くこの下町をそれなりに仕切ってきて培われた、勘。今度ばかりはそれも外れて欲しい。マオはそう願った。

NIGHTMARE

街の外れの安宿に着いたのは、すでに夕暮れ時だった。雨はようやく上がり、相変わらずの暗い空の色も夕日に染められて赤みがかっている。

部屋の中でようやく着替えた轢とＡｚｕｒｅは、幾度となくくしゃみを繰り返した。

「あー寒い。すっかり身体冷えちまった」

轢は身震いしてベッドにかけてあった毛布を剥がし、背中からすっぽりと被った。

「Ａｚｕｒｅ、大丈夫か？」

「……うん」

「無理すんなよ。顔、真っ白だぞ。そこにメシまだ残ってるから。腹が減ってたら食え」

「うん」

うなずきながらも、Ａｚｕｒｅに何かを食べようとする様子はない。轢もそれ以上彼を構うことはなかった。轢自身、ひどく疲れている。

「じゃ、俺寝るから。おやすみ」

轢はごろりとベッドに横になった。うとうととしかけた頃、その背中をＡｚｕｒｅが揺する。

「何だ？」

振り向いた轢に、Ａｚｕｒｅは言った。

「僕も寝る」

「ああ。そっちで寝ろよ」

指で空いた方のベッドを指し示すが、Ａｚｕｒｅは首を横に振る。

「ここがいい」

「あ？」

轢は呆れて起きあがった。

「場所変われってことか？　俺に向こうで寝ろって？」
「違う」
Ａｚｕｒｅはさらに首を横に振った。
「轢の横がいい」
「……なんで？」
怪訝そうな表情の轢に、Ａｚｕｒｅは視線を落として呟いた。
「ここがいい……から」
「だから、なんでだよ。俺、男と同衾する趣味はないぜ？」
「でも……」
茶化す轢の言葉にも、Ａｚｕｒｅは唇を少し開けたまま黙り込む。記憶をなくして不安なのだろうか。その気持ちがわからない轢ではないが、あまりに意表をついた申し出に少し驚いた。Ａｚｕｒｅは叱られた子犬のような表情で、上目遣いに轢の顔を窺っている。轢はため息をついた。
「……仕方がないな、今日だけだぞ。そっちから毛布持ってこい」
「うん」
Ａｚｕｒｅは素直に起き上がった。もう一つのベッドから毛布を引き剥がし、床の上をずるずると引きずりながら戻ってくる。
「ちゃんとくるまれよ。風邪引いたら厄介だからな」
「……わかった」
みのむしのようにぐるぐる巻きになって、Ａｚｕｒｅはごろんと横になる。言われたとおりに振舞う彼に、轢はくすりと笑った。
「おやすみ」
轢がそう声を掛けると、Ａｚｕｒｅはようやく安心したように微笑んだ。
「……おやすみ、轢」
ほどなく安らかな寝息が聞こえてきた。寝顔まで子供のようにあどけない。――変なやつだぜ、まったく。唇の端に笑みを浮かべたまま、轢もまた眠りに落ちた……。

――その夜、轢は夢を見た。

空を埋め尽くす爆撃機の群れ。
容赦なく降り注ぐ砲弾。
引き裂かれる街。
叩き割られる窓。
そして、
千切れとんだ体……。

甦った光景が、スライド写真のように視界を埋め尽くす。

腕。
焼け焦げた髪。
虚ろな眼窩。
溶けた皮膚。

――これは……これは何だ？

白い骨。
焼けた肉の匂い。

轢の耳元で、誰かが叫ぶ。

見るな！
忘れろ！
思い出すな！

――これは……一体……？

キシル！

また別の誰かが、彼を呼ぶ。
「……る、轢！！」
「……ッ？！」
轢ははっと眼を開ける。仰向けの彼の上にＡｚｕｒｅが覆い被さっていた。
「だいじょうぶ？　轢」
彼の澄んだ瞳が、轢の蒼白な顔を映している。
「……」
轢は荒い息をつきながら、そのすべてを見透かすような視線から眼をそらした。動悸が激しく、息苦しい。
「……ん。大丈夫だ」
Ａｚｕｒｅをやんわりと押し退け、轢は起きあがる。
「なんか、苦しそうだった。どこか、痛かったの？」
「……そうかもな」
あの日、轢は奇跡的に一命を取りとめた。だが、数え切れないほどのものを失ったことにはかわりがない。自分はあの時、何歳だったのか……。轢にはあの日より以前の記憶がほとんどない。幼かったということもあるし、きっとショックなものを見過ぎたせいだろう。両親の死に顔も、はっきりとは覚えていない。――きっと、思い出さないほうがいい。
「Ａｚｕｒｅ」
側で心配そうに座っている彼に、轢は声を掛けた。
「なあに？」
「お前、俺を呼んだか？」
「うん……」
Ａｚｕｒｅはうなずく。
「なんか、轢、苦しそうで、うなされてたから……。起こした方がいいかなって、思って」
「……ありがとな」

轢はＡｚｕｒｅの金髪をぽんぽん、と叩く。
「俺な、悪い夢見てたんだ」
「ユメ……？」
「ああ。昔の夢だ」
「……」
轢がもう一度ゆっくりと横になると、Ａｚｕｒｅも彼の隣で腹ばいになった。轢はただじっと、薄暗い天井を見つめる。
「俺、お前のこと言えないな。俺も昔のこと、かなり忘れてるから」
「轢も……？」
「お前、きっと戦争のことなんて覚えてないだろ？　それとも元々知らないか」
「うん……。僕、知らない……覚えてない」
轢は囁くようにつぶやいた。
「俺の家族は、戦争で死んだんだ」
「……」
Ａｚｕｒｅは、黙って轢の言葉に耳を傾けている。
「俺たちの住んでた街は国境からも遠くて……戦場とは関係ない、普通のところだったらしい。けど、俺たちも知らないうちに街の地下に軍事施設が作られていて、それを狙ってある日爆撃機が飛んできた。……まあ、俺も後から聞いた話で、どんな街だったかも全然覚えてないんだけどさ」
轢はそのままゆっくりと眼を閉じる。だが、闇の中には何も浮かんでこない。そのことに少し安堵した。やはり自分は忘れている。だからこそ、生きていける。
「街は壊滅して、家も消し飛んで、家族も消えた。俺だけが――生き残った。気がついたら、俺はひとりで灰色の空の下をあてもなくさまよってた」
「……」
「なんで俺だけ生き残ったのかはわからない。きっと、たまたまだと思う。でも……俺はまだ生きてる」

「……うん」
「辛いことも苦しいことも、たくさんあった。だけど、俺は一度だって生きることを諦めたことはない。何にもなくても……生きていける」
轢は寝返りを打ち、Ａｚｕｒｅの方へと向き直った。
「だから、Ａｚｕｒｅ。お前もこれだけは覚えとけ」
Ａｚｕｒｅの瞳は深く、轢を映し込んでいる。その奥に語りかけるように、轢は告げた。
「お前は絶対に生き抜ける。何があっても、諦めさえしなければ」
「……」
Ａｚｕｒｅの静かな瞳が瞬く。轢はその眼を真っ直ぐに見つめて、
「記憶なんかなくても、意味不明な奴らに追われてても、絶対生きていける。お前が生きてく手伝いなら俺がするから。昔、ガキだった俺を助けてくれた人がいたのと、同じようにな」
「……うん」
Ａｚｕｒｅは穏やかな、暖かい笑みを浮かべた。轢はそんな彼の頭をごしごしと撫でる。
「起こして悪かったな。まだ夜中だ、寝ようぜ」
「うん」
Ａｚｕｒｅは瞼の下にその青を隠し、そして尋ねた。
「もう悪い夢、見ない？」
「……」
轢はしばらく考えて、答えた。
「……多分な」
――それに、もし見たとしてもきっと大丈夫だ。悪夢を見ても、お前が起こしてくれるから……。轢は泥のような眠りに引きずり込まれ、そしてそのまま夢を見ることはなかった。
空っぽで平和な、眠りだった。

CANDY MOON

「あれ、なあに？」
また始まった、と轢は苦笑した。Ａｚｕｒｅはいつだって好奇心旺盛で、轢に質問ばかりしている。まるで小さな弟ができたようだ。Ａｚｕｒｅの指差す先の空には、白くうっすらと輪郭の溶けかかった円弧が輝いている。
「月だな」
「ツキ？」
「そう。太陽の弟分みたいなもんだろ。……たぶん」
曖昧に言葉を濁す轢には気付かなかったかのように、Ａｚｕｒｅはにっこりと微笑んだ。
「じゃあ轢がタイヨウだったら、僕はツキだね」
「……え、何で？」
Ａｚｕｒｅは答えずに笑顔のまま空を振り仰いでいた。轢もつられて立ち止まる。
どうせ今日の仕事はもう終わりだ。マオの店で取り扱っている雑貨のひとつの買い付けを頼まれたのだが、すぐに終わった。偽造身分証明書の受け渡しとか、脱法ドラッグの売人との交渉よりはよほど楽な仕事である。……その分報酬は少ないのだけれど。マオもそういうところは甘くない。
今日の空の色は少し薄い。いつも灰色に澱んでいる空は、月も星も、時には太陽さえ、隠してしまっている。夜ならばぼんやりと月の光が見えることもあるが、こんな真昼に月を見たことなどなかった。……もしかすると見逃していただけかもしれない。こうして空を見上げるなど久しぶりだ。今日もＡｚｕｒｅが教えてくれなかったら、きっと轢は気付かなかっただろう。
「今日はラッキイなのかな？」
Ａｚｕｒｅは轢の顔を覗き込んでにっこり笑った。

「ラッキイ、ねえ……」
轢はつぶやく。確かに、ラッキイなのかもしれない。今こうして自分が生きていることも。まだ、Ａｚｕｒｅが追っ手に見つかっていないことも。
――いつまでこの日々が続くのだろう。続けていられるのだろう。
雑貨の仕入れ、闇ルートでのドラッグ売買、偽身分証明書の受け渡し。そんな仕事をマオに回してもらいながら、轢たちは生きている。数日で宿替えするのが多少面倒ではあるけれど、まあ、悪くない生活だった。Ａｚｕｒｅは素直でいい男だと思う。少し子供っぽいけれど、もしかしたらそれは記憶の影響かもしれない。仕事の相方としてもやりやすいし、基本的に相性がいいのかもしれない。
――こんな日々がずっと続いてもいい。轢は、そう思っていた。

廃墟のような街に人影は少ない。夜になれば姿を現す者たちもいるがその大半は薬物中毒者（ジャンキー）や職にあぶれたストリートチルドレンたちで、治安は最悪といっていい。
Ａｚｕｒｅはサングラスの下から、辺りをきょろきょろと見回している。やがて邪魔になったのか、Ａｚｕｒｅはサングラスに手を掛けた。こっそりと取り去ろうとする。
「あ、こら。サングラスを外すな」
轢は慌ててＡｚｕｒｅの手を抑えた。Ａｚｕｒｅは唇をとがらせる。
「だって、見えにくい……」
「下町の鉄則はな、目立たないことだ」
「目立つ？　僕が？」
「お前、目立たないとでも思ってんのか？　そんな髪とか目のやつ、この辺にはいねえだろ？」
「……僕、変？」
元気をなくしたＡｚｕｒｅに、轢は静かに言葉をかけた。
「変じゃない。ただ目立つんだ。俺は――いいと思うぜ」

「ほんとう？」
「ああ」
「良かった」
Ａｚｕｒｅはにっこりと笑った。その表情に曇りはなく、轢はほっとする。確かに、Ａｚｕｒｅの瞳はいい色だった。綺麗で、曇りのない、澄んだ青。この街にはふさわしくないくらい、きらきらと輝いている。そんな色は見たことがないはずのに、懐かしいのは何故だろう……。
「そういや、この辺も久しぶりだな」
轢は辺りを見回し、苦笑した。あまりよくは覚えていないが、轢がもっと幼かった頃、この路上で生活していた。盗みもしたし、騙しもした。それでも人を傷つけたり殺したりしたことはない。それは彼のようなストリートチルドレン出身の者には珍しいことで、それがマオにも信用されている原因なのかもしれない。
――人を殺せないのは、親の死に顔を思い出したくないからかもしれないな……。
街路に溢れている犬猫の死骸、そういったものですら轢は避けている。体の内側から何かがぞわぞわと這い上がってくるような、何ともいえない不快感がせりあがってくるのだ。――死は、嫌いだった。
「あ！」
ぼんやりとしていた轢は、Ａｚｕｒｅの上げた声に驚いた。
「どうした、いきなり……」
「あそこで何か売ってる。待ってて、僕見てくるね」
「おい」
轢が止める暇もなく、Ａｚｕｒｅは後も見ずに駆けて行った。ふだんは轢の服の裾をつかんで離さないというのに。轢は苦笑する。
Ａｚｕｒｅは、どうやら露店を見つけたらしかった。こんなところで露店とは珍しいな、と轢は驚く。路上に品物などを広げていれば、必ず腹を減らしたストリートチルドレンたちの襲撃に遭うから

だ。店舗を構えている者すら、皆厳重な警戒をしているというのに。だが轢は逆に、警備に金を払える余裕のあるような店からしか盗まなかった。それは轢の、ちっぽけな矜持だったのかもしれない。

「転ぶなよ！」

轢は慌ててＡｚｕｒｅの後を追った。

「ねえ、それお菓子？」

「ああ、そうだよ」

Ａｚｕｒｅの声に、店の奥に居た老婆が顔を上げる。

「キャンデーもガムも、クッキーだってあるよ」

「うーん……何にしようかな……」

Ａｚｕｒｅが悩んでいる間に追いついた轢が、老婆に声をかけた。

「こんなところで露店やってて、ワルガキどもに荒らされたりしねえか？」

「しないよ」

老婆はゆっくりと首を振った。その片目は白く濁っていて、ほとんど見えていないらしい。

「うちのお客は戦争で親を亡くしたり、捨てられたりした孤児ばかりさ。この店はね、そういう子供たちに面倒見てもらってるんだよ。商品は必ず金を払って買う。新入りの悪ガキがうちから万引きしようとしたらコテンパンにしてくれる。時々やりすぎるから止めるのが大変だよ。……昔はあんたのいうように、苦労したけどね」

「そうか……」

轢の脳裏にふとかすめたセピア色の何かは、形にならないままに消えた。老婆は言葉を継ぐ。

「そう、子供たちが変わったのは、一人の男の子がきっかけだったんだ。その子も戦争で両親を失った孤児だったけどねえ」

「……うん」

Ａｚｕｒｅが頷く。その顔は見たことがないほど穏やかで、優しくて、轢ははっとした。子供っぽいとばかり思っていたＡｚｕｒｅ

にこんな表情ができるとは思わなかった。
老婆は懐かしむように目を細めた。
「その子は変わってたよ。一日中小銭を稼ぐために走り回って、そのお金をやりくりして余らせてね、私のキャンデーを買いに来るんだよ。『一つ頂戴、ちょっとおまけしてよ』って……」
「……」
「その子も孤児で、一日中小銭を稼ぐために走り回ってた。そのお金をやりくりして、余裕のある日には必ずうちに買いに来るんだよ。『ちょっとおまけしてよ』って……」
「オマケ、した？」
目を輝かせて尋ねるＡｚｕｒｅに、老婆は笑ってうなずいた。
「それはもちろんさ。だけどその子、うちのものを盗んでる他の子のことなんて、てんで無視してるんだ。注意してくれるわけですらないんだよ。ただ、自分は盗まずに買いに来る。それだけ」
「……それだけ？」
「そう。不思議なもんだねえ、その子を見ていた周りの子供たちが、少しずつ盗みを止めていった……代わりに、ちゃんと買っていくようになったんだよ。ちょっとお金が足りない子もいたけどね、でも私は売ってやったよ。元々子供は好きだったからね。私の子供は、戦争で全員死んじまったけど……」
「……その子、今でもこの辺りにいるの？」
「いつの間にか見なくなっていたねえ。どこでどうしてるのやら……きっと、もういい大人だ」
老婆は嘆息した。
「ブラウンの眼の綺麗な子だったよ。気性が真っ直ぐで、人を傷つけることは絶対にしない子で……」
「婆さん」
轢は呟いた。
「そいつは……相変わらずだよ」
「え？」

老婆が顔を上げた。轢は微笑む。彼女の目に自分の表情は見えないのかもしれない、と思いながら。
「金がなくていつも苦労してるのに、露店で品物広げてちょこんと座ってるばあさんを見ると思わず金を出したくなっちまう。……そんなお人好しだよ」
「……あんた」
「だからそいつは、きっと元気にしているさ」
「……そうかい」
老婆は皺だらけの顔をくしゃくしゃにした。
「そうかい……」
「轢……？」
Ａｚｕｒｅが不思議そうに轢を覗き込む。そのブラウンの眼に溜まった液体を、彼は物珍しそうに眺めていた。
そう――俺は相変わらずだ。だけど決して、悪くない。
轢は軽く手の甲で顔を拭った。
「とりあえず婆さん、キャンデー二つもらおうか」
「はいはい」
老婆は差し出した轢の手の平に、キャンデーを四つ置いた。
「多いぜ？」
「いいんだよ。おまけしてあげる」
老婆は顔を上げた。
「盗むよりも買ったものの方が美味いって、昔あんたは言ったけどね。もっと美味いのは誰かと一緒に食うものだよ」
轢は思わずＡｚｕｒｅを見た。一足先にキャンデーを舐め始めたＡｚｕｒｅは、その甘さが気に入ったらしく嬉しそうに笑っている。
「轢も、ほら」
彼の視線に気付き、Ａｚｕｒｅは轢を促した。
「食べなよ」
「……そうだな」
紙を剥き、口に含む。途端に広がる甘い味。ひどく懐かった。

「あんたはもう、一人じゃないんだねえ」
しみじみと語る老婆の声を聞きながら、轢は真昼の月を見上げた。うっすらと滲む白い光。掻き消えそうな危うさを抱えながら、それでもそこにある。今の自分の状態もそうかもしれない。不確定な状況に身を任せながら、それでも死なずにここに居る。
「轢……」
Ａｚｕｒｅの髪をくしゃくしゃと撫で、轢は言った。
「行くぞ」
「うん」
尻尾を振る子犬のように、Ａｚｕｒｅは轢の横に並ぶ。
「ねえ、どこに行くの？」
轢は小さくなったキャンデーをガリッと噛んだ。
「……さあな」

真昼の月が見えなくなるまで、
口の中のキャンデーが溶けてなくなるまで、
俺たちがこうして生きていられる限り、
どこへでも歩いていこう。
そう、
どこへだって行けるはずだから……。

部屋には香ばしい匂いが充満していた。
「もうちょっとで飯できるからな。待ってろよ」
轢は慣れた手つきでフライパンを扱っている。その横をＡｚｕｒｅがうろうろと落ち着かない様子で歩き回っていた。
「うん。……でも僕、何もしなくていいの？」
轢は不機嫌そうに振り向く。
「砂糖と塩を間違えて気付かないようなやつに、料理の手伝いなんてさせられるか」
「むう」
「ふつう味見したらわかるだろ。なんでお前気付かないんだ。味覚オンチか」
「オンチ？」
轢はため息をついた。ついで、古びたコンロの電源を切る。
「……まあいい。とりあえず飯食おう。冷めたらまずくなるし」
「はーい」
先ほど綺麗に洗っておいた皿を使って、テーブルに料理を並べる。Ａｚｕｒｅと出会ってから言うようになった「いただきます」にも、随分慣れてきた。
轢は行儀悪くフォークをくるくると回す。
「それにしても、宿を点々とする生活ってのは、案外きついもんなんだな。限界が来る前に、マオが部屋を見つけてくれて助かったぜ」
「ん」
Ａｚｕｒｅは食事に夢中のようだった。苦笑する。
「お前、そんなにがっつくと喉つめるぞ」
「平気だよ。……これ、美味しいね」
轢は苦笑交じりに頬を緩めた。
「お前、味わかってんのか？」

「うん、美味しいよ？」
Ａｚｕｒｅの食の進みっぷりを見ると、それは本心らしい。
「……まあ、まずくないんならいいけどな」
自分の料理を他人が食べているなど、何だか変な感じだった。Ａｚｕｒｅと出会う前では考えられないことだ。ずっと独りだったし、極端な話、腹が膨れれば何でも良かったのだ。しかし他人に美味しいと言ってもらえるのは、思っていたよりも気分のいいものだった。
ふと思いつき、轢はＡｚｕｒｅに尋ねる。
「お前、何か好きな物ってあるのか？」
「好きな物？」
Ａｚｕｒｅはきょとんと首をかしげた。
「そう。作ってやろうと思って」
「うーん」
記憶のないＡｚｕｒｅには、少々難しい質問だったかもしれない。
「ないのか？」
「轢の作るものは何でも美味しいもん。あ、おかわりしていい？」
Ａｚｕｒｅは空になった皿を残念そうに見つめた。
「ああ。俺、もう腹いっぱいだから、好きなだけ食っていいぞ」
「やったあ！」
Ａｚｕｒｅは嬉しそうにフライパンを引き寄せる。
「……有り合わせを適当に炒めただけで、そこまで喜ばれるのも何だかなー……」
轢は面映くなって頬をかいた。Ａｚｕｒｅはぴたりと手を止め、顔を上げる。
「轢、次は僕も手伝っていい？」
「……手伝いたいのか？」
「うん」
轢はよし、とうなずいた。
「じゃあ教えてやる。ただし、もう砂糖と塩は間違うなよ」
「わかった。粒が小さくてさらさらしてる方が砂糖で、固まってじ

やりじゃりするのが塩だよね」
「……いや、その覚え方はどうかと思うが……ま、料理してるうちには味覚オンチも治るだろ。っていうか治ってくれ」
Ａｚｕｒｅは屈託なく笑う。
「治るといいね」
「他人事みたいにいいやがって……」
轢のぼやきを聞いているのかいないのか、Ａｚｕｒｅは椅子から立ち上がった。
「ごちそうさま！　お皿は僕が洗うから、置いておいてね」
「おう、ありがとな」
キッチンから水音と、そしてＡｚｕｒｅの適当な鼻歌が聞こえてくる。轢はぽつりとつぶやいた。
「……俺が作ったからって、気を遣って後片付け担当しなくてもいいのに。頭の中すっからかんに見えるけど、案外そうでもないんだよな、Ａｚｕｒｅは」
洗い物が終わるまでにはまだ時間がかかるだろう。轢は立ち上がった。
「Ａｚｕｒｅ、先にシャワー浴びてくるぞ」
「うん！」
数分が経ち、Ａｚｕｒｅが濡れた手をシャツの裾で拭いながら戻ってきた。部屋を見回すが、轢の姿はない。彼の顔から表情が消え、青い瞳が空虚な孤独のいろを映し出した。ぼうっとつぶやく。
「この部屋の壁、そらのいろと同じだ。灰色。でも、たしか……どこかで白い壁を見たことある気がする。どこだっけ……」
壁に背中をつけて座り込み、小さくなって膝を抱える。
「どこだっけ……」

それは、白い夢。白い建物、白い部屋――彼の世界はどこも白く彩られていた。そこがどこかは知らない。生まれたのも育ったのもその場所だった。

「Ａｚｕｒｅ」
呼ばれて彼は振り向く。彼を呼んだその人のまとう服もｍ白かった。ハクイというものらしい。ここにいる人は皆着ている。
「スワン？　何？」
長い黒髪を項でまとめたその女性は、彼に一番優しくしてくれる人だった。駆け寄ると、彼の短い金髪を撫でてくれる。そんな風に彼に触れてくれるのは、彼女だけだった。
「検査よ。いらっしゃい」
「……はーい」
大嫌いなケンサの時間だと聞いた彼は眉を顰めたが、それでもスワンに逆らうことはしなかった。それはただ、彼女を困らせるだけだと知っていたから。
スワンに手を引かれて長い廊下を歩く。すれ違う大人たちは皆彼を見ない。目が合ってもどこか慌てたように逸らしていく。まるで、Ａｚｕｒｅなどどこにも存在しないように。
Ａｚｕｒｅは立ち止まり、彼の頭よりも随分高い位置にある窓を見上げた。薄暗い灰色が見える。
「きたない色……」
「立ち止まっちゃ駄目よ、Ａｚｕｒｅ」
スワンの手が彼を引っ張り、再び彼は歩き出した。

長い長い検査の後、彼は自室にかえされた。この部屋の窓には金属製の格子が嵌まっていた。
Ａｚｕｒｅは白い机を窓の下まで引き摺り、その上に乗った。覗きこむと、かろうじて外が見える。
彼の鮮やかな青い眼が灰色の空を映して瞬いた。
「やっぱりきたないよなあ……」
彼のいる建物は、ぐるりを高い壁で囲まれている。だから、窓から覗いても見えるのは壁と空だけだった。コンクリートの壁と空の色がとても良く似ていて、Ａｚｕｒｅの唇からため息がこぼれた。

物心付いた頃から一人でここにいる。スワンが教えてくれることだけが、彼の持つ知識の全てだった。字もほとんど読めない。
――ぼくは何故、ここにいるんだろう。
この問いに答えてくれる人はいない。彼の周りにいるのはほとんど大人たちばかりだ。時折彼と同じ年頃の子供を見かけることもあるのだが、話したことはない。話し掛けようとしてもスワンに怒られて止められてしまう。そして――何故か、彼らはいつの間にかいなくなってしまうのだった。
部屋の扉がノックされ、Ａｚｕｒｅは気だるげに返事をした。
「食事の時間よ」
スワンがお盆を持って入ってくる。クリームシチューとパンを見て、彼の顔が綻んだ。
「好物なの？」
「うん。僕シチュー大好き」
「そう……」
スワンはＡｚｕｒｅの向かいに腰掛け、独り言のように小さく呟いた。
「あの子と同じね……」
Ａｚｕｒｅはスプーンを口にくわえたまま眼を上げる。
「あのこ？　誰？」
「何でもないわ」
スワンは首を横に振った。長い髪が左右に揺れる。
「さあ、食べてしまって」
「……うん」
Ａｚｕｒｅは不服顔ながらも大人しく食事を続けた。
――つまらない。
自然とため息がこぼれる。
――生きているってどうしてこんなにつまらないんだろう。
「ねえ」
彼が俯いてしまったのを気にしたのか、スワンはとりなすように

言った。
「いいものをあげるわ」
「いいもの？」
「そうよ」
スワンは悪戯っぽく微笑む。
「貴方にぴったりなもの」
彼女は白衣のポケットから小さな本を取り出した。
「ぼく、本読むの苦手」
「大丈夫よ、これは読むものじゃないから」
スワンは彼の膝の上にそっと乗せる。
「題名のところ、ほら」
「何て書いてあるの？」
「『Ａｚｕｒｅ』」
「それ、ぼくの名前だ！」
Ａｚｕｒｅは顔を上げて眼を瞬いた。
「どういうこと？」
スワンは笑ってページをめくる。
「Ａｚｕｒｅってどういう意味か知ってる？」
「知らない」
彼は吸いつけられたように本を見つめた。鮮やかな青にいくつもの白い塊が浮いている写真が、ページを埋めつくしている。その白はひどく柔らかそうで、青はどこまでもまぶしく澄み切っていた。
「Ａｚｕｒｅはね……『青空』っていう意味なの」
「あおぞら？」
Ａｚｕｒｅはあっと叫んだ。
「もしかして、これって全部空の写真？」
「そうよ。こっちが本当の空なの」
「すごいね……きれいだ」
Ａｚｕｒｅは茫然とつぶやいた。彼は灰色の空しか知らない。こんなに綺麗な色の空があるなんて……。

濃淡のある青や紫で彩られた空はそれぞれ違った表情を持っている。いつも不機嫌に黙りこくっている薄汚れた空しか知らない彼には、空がこんなに沢山の表情を持っているということが信じられなかった。

スワンは一つの写真を指差して彼の眼を覗き込んだ。

「ほら、貴方の眼の色よ、Ａｚｕｒｅ」

「ぼくの……？」

「そうよ」

何故か泣きそうな顔で微笑む。

「綺麗な青い色だわ」

「……どうしたの？」

彼女の顔色があまりに悪いのに気付き、Ａｚｕｒｅは眉をしかめた。

「何かあった？」

「何もない。何もないわ。でも」

スワンはＡｚｕｒｅを抱きしめる。

「許して……許してね、Ａｚｕｒｅ」

「何を？　何を許すの？」

「貴方はここから出ることはできない」

苦しそうな彼女の声。

「どうして？」

「……」

Ａｚｕｒｅは食い下がる。

「ぼくは何？　どうしてここにいるの？　どうして？」

「それは」

スワンは顔を背けた。

「言えないの……言えないの、Ａｚｕｒｅ」

「だから、どうしてなのさ」

「私たちがやっていることは、禁じられたことなの」

「え？」

スワンは表情を消して立ち上がった。
「もう行くわ。お皿を下げるわよ」
「どういうこと？　僕、全然わかんないよ！」
Ａｚｕｒｅも立ち上がり、スワンの白衣の袖を引いた。
「何が禁じられているの？　ぼく、どうして」
スワンはもう何も言わずに彼の皿をひったくるようにしてとり、足早に部屋を出て行く。重い音と共に、扉が閉まった。
Ａｚｕｒｅは誰もいなくなった部屋で足を踏み鳴らし、泣いた。
――こんなに泣いたことはなかった。
ぼくは誰？
どうしてここにいるの？
ここはどこ？

――本当の空は、どこ？

「Ａｚｕｒｅ、おい、Ａｚｕｒｅったら」
「……！」
Ａｚｕｒｅははっと眼を覚ました。視界いっぱいに広がる轢の顔。
「眼が覚めたか？　うなされてたぞ」
「……うん。大丈夫」
何か良くない夢を見ていた。胸にもやもやとわだかまる何か……
夢はその暗い輪郭だけを滲ませながら、夜に溶けていく。
Ａｚｕｒｅは丸めていた体を伸ばした。がちがちに強張っている。
「何の夢だ？」
「……思い出せない」
体を起こし、顔を軽く左右に振る。金髪がぱさぱさと揺れた。
「何も……思い出せない」

――逃げなさい、Ａｚｕｒｅ。

あれは誰だったんだろう。

――やっぱり間違ってる。

長い黒髪、涙に濡れた黒い瞳。

――人間を人間の代わりにするなんて、間違ってる……！

「思い出せない……」

Ａｚｕｒｅはもう一度つぶやいた。遠い記憶、近い記憶。それらが交じり合った渦が彼を巻き込み、惑わせる。

「Ａｚｕｒｅ、熱いシャワー浴びて来いよ。さっぱりするぜ」

轢は少しわざとらしいくらいに明るい口調で、Ａｚｕｒｅを促した。

「うん……」

ぼうっとした様子に、轢は不安そうな眼差しを投げる。どこか、Ａｚｕｒｅの様子がおかしかった。どうしようもなく嫌な予感がしていたが、それでも聞けなかった。もしかしたらＡｚｕｒｅの消えた記憶に関することかもしれない。

轢は、怖かったのだ。

忘れていたかった。Ａｚｕｒｅの記憶がないことも、よくわからない奴らに追われていることも。いつか、このままではいられなくなる日が来るのかもしれない。それが、怖かった。

――この平和な生活が終わってしまうのが、轢はどうしようもなく怖かった……。

KNIFE

窓の外、既に日は高い。轢はやや乱暴にドアをノックした。返事はない。
「いつまで寝てる気だ、あいつ」
ぶつぶつとつぶやきながら、ドアを開ける。二つ並んだベッドの片方が毛布で盛り上がっていた。その中から、もごもごとつぶやきが洩れてくる。
「んー……もう食べられな……い……」
轢は毛布を思いきり剥がした。
「もう何も食わんでいいから、起きろー！！」
「わあ！！」
毛布の下からＡｚｕｒｅが飛び起きた。鮮やかな金髪はあらゆる方向に跳ね放題だ。
「起きろ、もう昼になるぞ！！」
Ａｚｕｒｅはまだねぼけているのか、ぼうっとした様子で辺りを見回している。
「あ、あれ？　ぼく……」
「何だ。お前の大好きなニンジンの怪物に襲われてたのか？　それともシチューに溺れたか？」
「違うよ。いろんな色のキャンデーが、空からいっぱい落ちてきて……」
轢はぷっ、と噴き出した。
「それ、頭に当たったら痛いんじゃないか？」
「ううん。甘くって、美味しかった」
「……そうか。そりゃ良かったな。じゃ、早く顔洗って、飯食いに来いよ」
「はーい！」
ばたばたと部屋を出て行くＡｚｕｒｅの後姿を見送り、轢は腕を

組んだ。
「そろそろ、この部屋も引き払わないといけないな。マオの情報じゃ、最近このあたりに妙なやつらがうろついているらしいし……。もしかしたらＡｚｕｒｅを探してるやつらかもしれない」
――しかし、そいつらは何故Ａｚｕｒｅを探しているのだろう。Ａｚｕｒｅが持っていた大金と関係あるのか……。
轢は首をひねる。
「まずい金だから表沙汰にはできないとか……いや、あいつが金を持ち逃げするようなやつか？　まさか。金じゃないとしたら……あいつ自身に、何かあるのかもしれない。実はどこかの御曹司で、家族が手を尽くして探してるとか……。それにしちゃ手荒な風だったしなあ」
バタン、と洗面所のドアが開いた。轢は声を掛ける。
「飯食ったら荷物まとめるぞ」
顔を洗っただけなのに何故か服までびしょびしょに濡らして、Ａｚｕｒｅはきょとんと轢を見つめた
「どこか行くの？」
「そろそろ別の街に移動するんだ。そっちにもマオの持ってる部屋があって……。とにかく、やつらをまくにはその方がいいから」
「……」
Ａｚｕｒｅは深くうつむいた。やがて、ぽつりとつぶやく。
「……ごめんね、轢。僕のせいで……轢を巻き込んで」
轢は笑った。
「何言ってんだよ」
Ａｚｕｒｅの金髪を手荒に撫でる。
「俺、結構引越しするのは好きなんだ。気にするな」
「でも……」
「それに、お前は俺の初めての友だちだからな」
Ａｚｕｒｅがはっと顔を上げた。
「トモ、ダチ？」

轢は微笑む。
「ああ。マオとか、他のやつらも仲間だとは思ってるけど……、やっぱり所詮利用しあってる関係なんだよな。別にそれが悪いとは思わない。生きていくためにはお互いが必要なんだから。……でも、俺はＡｚｕｒｅを利用したいとは思わないし、お前だって俺を利用してるつもりはないだろ？」
「うん……」
「だから……俺とお前は、友だちなんだと思う」
Ａｚｕｒｅはやがて、透き通るような笑みを見せた。
「……そうだね。トモダチだね！」

――友だち。

初めて手に入れたこの関係の心地良さに甘えるように、轢は現実から目を逸らそうとしていた。Ａｚｕｒｅの消えた過去なんて、どうてもいいと……しかし、やはりそれは許されることではなかったのだった。

相変わらず、廃墟のような街に人影は少ない。
「ふう……」
荷物をつめたバッグを肩に背負い、轢はぼんやりと灰色の空を眺めた。いつ見ても変わらない、不機嫌な表情。
一箇所に落ち着いて暮らせないのはやはり不便だが、一人のときよりも今のほうが生きていて楽しいような気がした。不器用なＡｚｕｒｅはドジを踏んで轢を苛立たせることもあるが、以前の自分にはそんな感情の起伏すらなかったのだと気付いて唖然とする。変わらない日々。変わらない自分。そんな自分の生活の中に飛び込んできたＡｚｕｒｅは、まるで分厚い雲を切り裂いて地上に届いた一条の光だった。Ａｚｕｒｅと一緒にいるようになってから、笑う回数もずっと増えた。人はひとりでは笑えない。笑顔は誰かのためにあ

るものなのだと、そう思う。
「Ａｚｕｒｅは行ってみたいところ、あるのか？」
ふと思いついて尋ねるとＡｚｕｒｅは少し考えてから、
「どこでもいい」
と明るい笑みを見せた。
「轢と一緒なら、どこでもいいよ」
「……そうか」
轢は目を伏せて表情を緩める。

きっと、この街のどこへ行っても同じ。
この空の色は同じ。
俺たちは、同じでいられるだろうか？

「轢？」
Ａｚｕｒｅが心配そうに俯いた轢を覗き込む。
「どうしたの？」
「どうもしねえよ」
轢は顔を上げ、Ａｚｕｒｅの背中を軽く叩いた。
「行こう」

――ザッ、

舗道の小石が鳴った。その音の方角に視線を向け、轢は絶句する。
そこに、一人の男がいた。以前Ａｚｕｒｅを追ってきた男たちと同じ服装――同じ雰囲気。
「探しましたよ」
穏やかに微笑んで見せるが、目は笑っていない。
「彼を返して頂きたい」
「……」
男の視線はＡｚｕｒｅに向いていた。Ａｚｕｒｅは轢の腕に手を

かけてぎゅっと握る。轢はＡｚｕｒｅを庇うように立ち塞がった。
「……なんでＡｚｕｒｅを探しているんだ」
「……」
「Ａｚｕｒｅはどうして記憶を失っているんだ」
「……」
「Ａｚｕｒｅを連れて帰ってどうするつもりだ」
「……」
「お前たちは一体何なんだ」
「……」
「何にも答えられねえのかよ」
沈黙を守っていた男は、ふ、と相好を崩す。
「貴方こそ、彼の何なのですか？」
「え……？」
轢は虚を衝かれたように目を瞬いた。
――道端に倒れていたＡｚｕｒｅを連れて帰り、世話をした。追ってくる奴らから逃げて、それ以来一緒にずっと逃げ続けている……。
「貴方が何故彼のことに関わるのですか？　元々住んでいた家を捨てて、こんな流浪の生活を続けてまで」
「……轢……」
轢は振り向かなかった。Ａｚｕｒｅの声が細かく震えている。見なくても、彼が今どんな表情をしているのか暗いはわかっていた。
「ごめん……迷惑かけて……」
「……謝るな」
轢は短く言い、男を睨みつけた。。
「俺はどうも貧乏性でね。落ちてるもんを見ると拾いたくなるんだ。それに……」
肩を痛いほど掴むＡｚｕｒｅの手を上からぽんぽんと叩いて、
「こいつとは友だちだからな」

Ａｚｕｒｅの声が、その言葉を小さく繰り返す。
「トモダチ……」
「……」
男はやれやれ、といったように首を左右に振った。
「困った人だ。できるだけ貴方に怪我はさせたくなかったのですけどね」
Ａｚｕｒｅがはっと息を飲む。
「轢！」
あっ、と思ったときにはもう遅かった。横手から突然なぐりかかってきた別の男の拳に吹っ飛ばされ、路地の壁に叩きつけられる。頭ががん、と音を立て、轢は痛みに声も上げられない。
――最悪だ……！
「轢！」
Ａｚｕｒｅが青い顔をして轢に駆け寄る。
「逃げ……」
脳震盪を起こしたのか、うまく喋れない。
「逃げ、ろ……」
それだけを必死に告げて、それでもＡｚｕｒｅは首を横に振って……。
――俺も馬鹿だけど、お前も馬鹿だよ。
視界が暗転し、轢は意識を失った。

――カラン。
小さく響いた金属音に、Ａｚｕｒｅははっと視線を向けた。大型のナイフ。轢が果物の皮をむくのに使っているのを見たことがある。やらせてくれと頼んだが、「指を切るのがオチだ」と触らせてもくれなかった。
「……」
Ａｚｕｒｅはそれを手に取り、指に這わせた。みるみるうちに赤

い軌跡が生じ、粒がぷつぷつと湧き出る。
――轢の額から流れているものと同じ……赤い……。
轢に怪我をさせてしまった。僕のせいで……僕を守るために、轢は血を流した。だから、今度は僕が轢を守らなきゃ……。
「保護者はもういないぞ」
男の声が背中から聞こえる。
「さっさと帰るんだ。Ａｚｕｒｅ」
――その名前を呼ばれたとき、ぞっとした。轢が呼ぶのとも、彼の友人という三つ編みの人が呼ぶのとも明らかに違う。冷たい声音。

冷たい床。
水。
壁。
食事。
金属。
コード。
ベッド。

そこに横たわっている、自分とよく似た誰か……。
「……轢」
溢れそうになった言葉――記憶――を、Ａｚｕｒｅはその人の名を呼ぶことで封じ込めた。
「……轢」
血の流れる轢の額を拭い、Ａｚｕｒｅはゆらりと立ち上がる。
「僕は、帰らない」
手にはナイフ。男が怯んだ。
「あ、Ａｚｕｒｅ……？」
「僕は、絶対に帰らない」

――人にはみんな、代わりが用意されているのよ、Ａｚｕｒｅ。

だからきっと、こいつらにも代わりがある。壊しても大丈夫。誰かがそう言っていたから……。

でも、轢は違うよね。轢の代わりなんてあるはずない。轢は轢だもの。

――僕のトモダチだもの……。

路地裏に響いた悲鳴。それを轢が聞くことはなかった。

PROMISE

――頭が、痛い。
轢は眼を覚まし、見慣れない天井が視界に入ってひどく戸惑った。
「ここは……？」
「轢」
ベッドに寝かされたままの姿勢で顔を横に向けると、そこにはＡｚｕｒｅが座っている。彼は心配そうな表情で、それでも少し安堵の色を浮かべていた。
「気がついて良かった」
「……えっと、あれ？」
轢は頭に手をやってそこに巻かれた包帯に気付く。
――ああ、そうだ。Ａｚｕｒｅを追いかけてきた奴らに殴られて吹っ飛んで……頭を怪我したんだっけ。
「よく逃げられたな。怪我はなかったか？」
手を伸ばしてＡｚｕｒｅの腕を軽く叩くと、彼はあどけなく微笑んだ。
「うん、大丈夫。だって、轢は大切なトモダチだから」
ガチャリ、と扉の開く音がした。轢は視線だけを動かしてそちらを見遣る。
「……気がついたか？」
「マオ……？　じゃあ、ここはお前の？」
「俺の店の裏手にあるアパートの部屋だよ。いちおう手当てはしておいたが……」
「ありがとな」
「礼ならＡｚｕｒｅに言った方がいいかもしれん。お前を俺のところまで運んできたのはＡｚｕｒｅだから」
「ええ？」
轢は驚いてＡｚｕｒｅを見上げた。

「……重かっただろ」
「ううん、そんなことないよ」
「よく道を覚えてたな。助かったよ」
　轢に褒められたＡｚｕｒｅは嬉しそうに微笑んだ。マオは少し複雑な顔でそんな二人を眺め、やがてＡｚｕｒｅに向かい口を開く。
「Ａｚｕｒｅ、悪いけどちょっと下から水を取ってきてくれないか。轢に痛み止めを飲ませたい」
「……」
　Ａｚｕｒｅは黙って轢の顔を見つめる。その表情には少々不服の色があった。轢はＡｚｕｒｅに頷いて見せる。
「頼むよ。頭がまだ痛むんだ」
　どうやらマオは轢に話があるらしい。そしてその場にＡｚｕｒｅがいては都合が悪いのだろう。
「……わかった」
　Ａｚｕｒｅは轢の言葉に素直に従い、部屋を出て行った。
　扉の閉まる音を背中で聞きながら、マオは轢をじっと見つめる。その唇から出たのは意外な問いだった。
「……あの男は一体何なんだ？」
「は？」
　轢はぽかんとマオを見上げる。
「Ａｚｕｒｅのことか？」
「そうだ」
「俺も良く知らないし、俺の知っているだけのことはお前も知っているはずだけど」
「……」
　マオは大きく肩で息をついた。
「そうか。そういえばお前は知らないのだな」
「何を？」
「気を失って怪我をしたお前を運んできたとき、あいつは全身血まみれだった」

「え……？！」
息を飲んだ轢に、マオは首を左右に振って見せた。
「違う、あいつが怪我をしていたわけじゃない」
「じゃあ、誰の血なんだ……？」
「さっき、情報が入ってきた」
マオは轢の視線を避けるように顔を背けた。
「とある路地裏で三人の成人男性の死体が発見された。全員服装は黒尽くめ。どれもナイフで滅多切りにされている。死因は失血死だそうだ」
「……」
轢はぽかんと間の抜けた顔でマオを見続けている。マオは厳しい表情になり轢を見つめ返した。
「……まさか」
轢はぽつりと呟く。
「まさか、Ａｚｕｒｅが……？」
「あいつは俺のところに来たとき、血のついたナイフを持っていたよ」
「……」
轢はぐら、とベッドの上で体を折った。
「……何で……まさか」
首を小刻みに左右に振る轢に、マオはその肩をつかんだ。
「あいつは何者なんだ、轢！」
「……だって、Ａｚｕｒｅが、そんな」
信じられない。信じたくない。Ａｚｕｒｅがまさか、誰かを殺すなど……！
「うっ」
猛烈な嘔吐が襲ってくる。目の裏がちかちかと瞬いた。その場にありもしない死の匂いを嗅いだようで、涙がこみ上げる。
「轢、現実から目をそむけるな。あいつがやったんだ。間違いない。さっき『お前が刺したのか』と聞いたらあっさりそうだと答えた」

「……だって、Ａｚｕｒｅにそんなことできるわけ」
「あいつは何者なんだ、轢！！」
カチャ、とドアノブの回る音がして、マオはさっと体を引いた。
「轢、水持ってきたよ」
Ａｚｕｒｅが部屋に入ってくる。ベッドの上で体を折っている轢を見て、慌てたように駆け寄った。
「どうしたの、轢。どこか痛いの？」
「Ａｚｕｒｅ」
轢は手を伸ばし、顔を覗きこんでくるＡｚｕｒｅの腕を強く掴んだ。
「何？」
Ａｚｕｒｅはきょとんと首を傾げる。轢はその無邪気な表情を見ないようにと、俯いたまま詰問した。……見てしまえば、信じてしまう。
「お前……自分を追いかけてきた奴らを殺したのか？」
「さっきの男の人たちのこと？」
Ａｚｕｒｅは心外そうな顔をした。
「殺してなんていないよ」
「本当か？」
「殺してないよ。壊しただけ」
「え？」
轢は顔を上げた。Ａｚｕｒｅは何の屈託もない表情で轢を見つめている。
「代わりがいるもの。いくらでも代わりがいるから、大丈夫なんだよ？」
「代わり？　何のことだ？」
轢は眉を寄せる。Ａｚｕｒｅは説明を求められ、困ったように首を傾げた。
「うーん、誰かがそう言ってたの……人間には代わりがあるって。壊れてもいいように、ちゃんと用意されてるんだって」

「誰がそんなこと言ってたんだ！」
轢は叫んでＡｚｕｒｅの肩を揺すぶった。
「い、痛……」
Ａｚｕｒｅは苦痛に顔を歪めながらも抵抗はせず、その青い瞳で轢をじっと見つめる。
「どうしたの、轢」
轢はぎっと唇を噛み締めた。
「じゃあＡｚｕｒｅ、俺の代わりもいるのか？」
「それはいない」
Ａｚｕｒｅは即答した。
「轢は轢だもん。他にはいないよ」
「俺とあの男たちと何の差があるんだよ！」
「でも！」
Ａｚｕｒｅは轢の手を振り払ってきっと眉を険しくした。
「あいつら、轢に乱暴したんだよ？　僕のトモダチの、轢に」
「だからって殺すことはなかっただろう？！」
「殺してない！」
「人間は壊れるとは言わないんだよ！！　そういうのを殺すって言うんだ！！」
Ａｚｕｒｅは首を左右に振った。
「わかんない……わかんないよ！」
「……Ａｚｕｒｅ……」
轢は絶句した。Ａｚｕｒｅはその青い瞳に涙を溜めている。
「僕は何も悪いことしていない。襲われたからやり返しただけだよ？　それに先に乱暴してきたのは向こうじゃないか。　轢とあの男の人たちのどこが違うって、全然違うよ。轢は親切だし優しい……でもあいつらは違った。僕のこと無理やり連れて行こうとしたんだもの。それとも」
Ａｚｕｒｅは青い瞳に傷ついた色を浮かべた。
「轢はあのまま僕が連れ去られた方が良かったの？」

「……そんなことは言っていないだろ？」
　轢は深呼吸をして冷静さを取り戻す。マオは言葉を失っている様子だった。
「ただな……、人は死ぬと元にはもう戻れないんだ。壊れても元に戻るモノとは違うんだよ。死人を生き返らせることは誰にも出来ない。だから、Ａｚｕｒｅが殺したあの三人は二度と生き返らない」
　――そう。轢の家族が生き返らなかったのと同じように……。
「……」
「お前が連れて行かれずに済んだのは嬉しい。それは本当だ。でも……でもやっぱり人が死ぬっていうのは嫌なことだ」
「……なんで？　代わりがあるのに。予備がちゃんと用意されてるのに」
「代わり？」
　轢はＡｚｕｒｅが震わせている拳にそっと触れた。
「何なんだ？　その代わりって」
「代わりは代わりだよ……。僕も良く覚えてないけど……誰かがそう言っていたの」
　Ａｚｕｒｅは困ったように首を横に振った。
「じゃあそいつが間違ってたんだ。Ａｚｕｒｅは俺を信じるだろう。だったら……」
　轢の言葉をさえぎるように、Ａｚｕｒｅは首を縦に何度も振った。
「わかった……轢が嫌なことだっていうなら、もうしない。約束するよ」
「……Ａｚｕｒｅ」
　轢ははっと息を呑む。Ａｚｕｒｅの瞳は、透明な涙を溢れさせていた。
「だから、もう怒らないで」
「……」
「僕のこと置いて行ったりしないで。嫌いにならないで。トモダチでいて……！」

轢はＡｚｕｒｅの両肩に手を置き、彼の目を覗きこんで大きくうなずいた。
「……わかった。約束しよう」
「……キシル……」
「お前はもう誰も殺さない。俺はお前を置いていかない。嫌いにならない。ずっと友達でいる」
「……うん」
「約束するな？」
「……する」
「分かってくれたらいい。もう、泣くな」
――俺は甘すぎるんだろうか。Ａｚｕｒｅは確かに人を殺したのに、俺は許そうとしている。
マオに視線を投げると、彼は肩をすくめただけだった。
――だって、捨てられない。
「轢、ごめんね。僕……僕、ごめんね」
轢は彼に頭を撫でられながらぼろぼろ泣いているＡｚｕｒｅを見つめた。――まるで子供のように轢に頼り切っている彼を、突き放すことはできない。
「ああもう、泣くなってば！」
轢は着せられていた寝巻きの袖で、涙と鼻水で汚れたＡｚｕｒｅの顔をぐいぐいと拭いた。
「もう、誰も殺すんじゃないぞ」
念を押されたＡｚｕｒｅはぐすぐす鼻を鳴らしながら頷く。
「轢と、約束したから」
「……そうだな」
轢は微笑んだ。
「だから、ずっと友達でいよう。な？」
「……」
Ａｚｕｒｅは一度眼を大きく見開き、やがてぶんぶんと顔を上下に振る。その仕草は本当に小動物のようで、轢は思わず笑みを零し

た。
「……」
マオはそんな二人の様子を見ながら複雑な表情を浮かべる。
――あんなに人が死ぬのを嫌がっていた轢が、曲がりなりにも殺人を犯したＡｚｕｒｅをあっさり許してしまうなんて。結局彼が何者なのか、何もわかっていないというのに……。
Ａｚｕｒｅは轢を信じきっているし、轢も彼に対して無防備すぎる。すべてが、もろい。そんな危うさを感じてしまうのは、考えすぎなのだろうか……？

ガコン、ガコンと古い洗濯機が回っている。やがて回転数が徐々に減っていき、辺りは静けさを取り戻す。最後に調子はずれな電子音が鳴って、洗濯の終了を告げた。その一部始終をじっと見守っていたＡｚｕｒｅが声を上げる。

「洗濯、終わったよ！」

ひょっこりと轢の顔が覗く。まだその頭には包帯が巻かれていた。

「風呂場に干しておけば夜には乾くだろ。ベランダは汚くって、使えたもんじゃねえよ」

「うん、わかった。……あ、轢は寝ててよ。まだ怪我治ってないんだから」

Ａｚｕｒｅに廊下を押し戻されながら、轢は怪訝そうな顔をした。

「怪我ったって……。別に洗濯くらいできるぞ」

「でも、手もすりむいてたでしょ？」

「あんなちっちぇえ傷、良く覚えてるなあ。とっくにかさぶた張ってるよ」

「とにかく、轢は何もしちゃ駄目なんだってば」

Ａｚｕｒｅは洗濯物をかごの中に放り込む。轢は苦笑しながらその様子を見守った。

「はいはい。……おい、落とすなよ。せっかく洗ったの床にぶちまけたら、洗い直しだぞ」

Ａｚｕｒｅは振り向き、悪戯っぽい笑みを見せる。

「だいじょうぶだよ。……そんな風だからあの三つ編みの人に『轢は心配性だな』って言われるんだよ」

轢は小さく舌打ちをした。別に本気で気分を害しているわけではないし、Ａｚｕｒｅもそのことはわかっているだろう。

「まったく、妙なことばっかり覚えるなよなあ。あと、『三つ編みの人』じゃなくてマオな。マオ。名前くらい覚えてやれ」

轢はふと部屋の隅にあるごみ箱に目を止めた。
「……あれ？」
捨てられていたベージュのシャツはＡｚｕｒｅのものだが、一面に散る赤黒い染みでばりばりに固まっていた。
――これはあの時、着ていた服……。
「お前、この服……捨てたのか？」
Ａｚｕｒｅは屈託なくうなずく。
「うん、捨てたよ。だって、血がいっぱいで取れなかったから」
「そうか……」
Ａｚｕｒｅはかごを抱えたまま部屋を出て行き、轢はひとり取り残された。――Ａｚｕｒｅはあれから何にも変わっていない。だから、つい忘れそうになってしまう。

Ａｚｕｒｅがひとを殺したということ。

轢は彼を許すと決めた。その判断は、きっと間違っていない。Ａｚｕｒｅはもうしないと約束したし、彼の優しさを既に轢は知っている。今も怪我を負った轢を気遣い、できる限りひとりで家事をこなそうとしていた。不器用ではあるが、一生懸命頑張っている。
「だから――もう大丈夫だ」
それはまるで、自分自身に言い聞かせているようだった。

マオの勧めで、轢たちは少しほとぼりが冷めるまで隠れていることにした。しばらくの間仕事をしなくても支障はない程度には、蓄えがある。怪我が治るまではのんびりと構えていられるだろう。
毎日Ａｚｕｒｅと騒がしく過ごすのは、楽しいものだった。まるで弟ができたみたいで――家族がいた頃の生活はこんな風だったのだろうかとさえ思う。
――もう、何も悪いことなんて起きなければいい。その祈りに何の力もないと知っていても、それでも轢は祈らずにはいられなかっ

た。

その日、Ａｚｕｒｅは一日中働き続けた。掃除、洗濯、そして轢に教わりながらの料理。彼なりに気を遣っていたのだろう。いつになく失敗は少なかった。

ベッドの上で大きな欠伸をしたＡｚｕｒｅに、轢は笑いかける。

「明日はちょっとくらい寝坊しても許してやるからな。しっかり寝ろよ」

しかし、Ａｚｕｒｅは涙目で首を横に振った。

「駄目だよ、朝ごはんの用意しなきゃ……」

「それくらいは俺がやるよ。それに、今日の夕飯もちょっとあぶなっかしかったからな」

Ａｚｕｒｅは眉を下げた。

「だって、料理って難しいんだもん……」

「お前の味覚が難しいんだよ。……ま、それでも最初よりはだいぶ上達したんじゃねえか？」

轢はベッドに横になり、やがてふと思い出したようにＡｚｕｒｅのほうを向いた。

「そういやお前、かなり寝相悪いぜ。たまにベッドから落っこちて、俺びっくりして飛び起きるもん」

Ａｚｕｒｅは意外そうに瞬きを繰り返す。

「本当？　僕全然気づいてないんだけど……」

「寝たままベッドによじのぼってる。結構怖いぞ、あれ」

「ご、ごめん……」

「謝らなくていいけど、ま、気をつけろよ。頭打ったらヤバいだろ」

「そうだね。……ベッドに縛っとく？　そうしたら落ちないよ」

轢は慌てて跳ね起きた。

「し、縛る？！　何だそりゃ」

視線の先のＡｚｕｒｅは、どこかうつろな表情をしていた。――あの、以前の夢を見たときと同じだ。轢は胸騒ぎを覚える。

Ａｚｕｒｅはぼんやりと答えた。
「うーんとね……暴れると、たまに縛られた、気がするんだ」
「暴れた……？　お前が？」
「よく覚えてないけど……」
つぶやき、轢を見つめる。その瞳は不安そうに揺れていた。
「無理して思い出すことはない。気にするな」
轢の言葉に、Ａｚｕｒｅは明るく微笑んだ。
「……そうだね」
電気を消した後も、轢は眠れずに暗い天井を見上げていた。暴れて、ベッドに縛り付けられるとは、一体どんな状況なのだろう。――やっぱりあの男の仲間がやったのか。そんなの、人間に対する扱いじゃない。……許せない。
きっとＡｚｕｒｅの過去は辛いものなのだろう。だったら思い出す必要などない。轢が子供の頃を忘れてしまったように、Ａｚｕｒｅも忘れてしまえばいい。
「忘れて、また新しく生き直せばいいんだ。……そうだよな、Ａｚｕｒｅ」
Ａｚｕｒｅは既に眠っているのか、それとも聞こえなかったのか。轢のつぶやきに、返事が帰ってくることはなかった。

翌朝、轢が起きると、部屋にＡｚｕｒｅがいなかった。慌てて跳ね起きる。記憶を取り戻したのか、それとも自分が寝ている間に追っ手に連れて行かれたのか――轢はくしゃくしゃに乱れた茶髪を指で梳きながらベッドから立ち上がった。
「Ａｚｕｒｅ？」
とりあえず呼んでみるが、返事はない。洗面所にもキッチンにも、もちろんシャワールームにも。Ａｚｕｒｅの姿はどこにもなかった。
轢はふと自問する――俺は何故こんなに焦ってるんだろう。Ａｚｕｒｅが危険だから？　……それだけじゃない。さびしいんだ。Ａｚｕｒｅがいないと。

「ついこの間まで、俺は一人で生きていたのに……」
戦争孤児の轢は、ずっとこの街で生きてきた。違法な仕事に手を染めもしたし、それなりに修羅場をくぐってきた。そんな轢と同年代なのに、対象的なほど子供じみたＡｚｕｒｅ。記憶をなくしたせいなのだろうか、轢に無限の信頼を寄せて疑うことを知らない。
確かに、Ａｚｕｒｅが轢を疑う必要などなかった。最初の追っ手から逃げたそのときから――いや、路地裏に倒れていた彼の、あの瞳を見たときから、一緒に生きていく覚悟は出来ていたように思う。
あの瞳――世界中の青という青を全て集めたような、深い色。

「くそ――」
焦燥の色を吐息に滲ませ、轢は窓際に歩み寄った。路傍に佇む人影に気付き、眼を見開く。
「あ、」
濃紺のニット帽に覆われた鮮やかなブロンド、濃い色のサングラス。グレーのジャケットはかつて轢のものだった。
「Ａｚｕｒｅ」
彼は追われる身であるにしては、目立ちすぎる外見だった。記憶のない彼には追われている理由すら定かではないのだが。
「何やってんだ、あいつ。あれだけふらふら出歩くなって言ってるのに……危機感ねえのかな、あいつは」
轢は安堵に口元を緩ませながらも舌打ちをし、家を飛び出した。
「轢！」
彼が声をかける前に、Ａｚｕｒｅが満面の笑みで振り向く。
「おはよう！」
「……おはよ、じゃねえだろ」
轢は笑っているのか怒っているのか良く分からない表情になって、Ａｚｕｒｅの額を指で小突いた。
「いたっ」

「いきなりいなくなったから、驚いたんだぞ」
「あ……、ご、ごめんなさい……」
Ａｚｕｒｅは身体を小さく縮こませる。その肩を、轢は軽く叩いた。
「もういいさ。遠く離れてたわけじゃないだろ？」
「うん。近くを散歩してただけ」
轢は手を伸ばしてそっとＡｚｕｒｅのサングラスを外してやる。思ったとおり、青い瞳は薄曇の朝日の中でも鮮やかに煌いていた。

この色が、好きだ。
どんな言葉で表せばいいのかわからない、この色。
青なんて言葉じゃ足りない。
Ａｚｕｒｅの眼の色。

「あのね」
Ａｚｕｒｅは轢が怒っていないと見て取ったらしく、彼の袖をつかんで引っ張った。
「なんだ？」
「僕、いいもの見つけたの」
「いいもの？」
「うん」
Ａｚｕｒｅの指差す方には瓦礫の山があった。轢は眉を寄せる。
「あれが、いいものか？」
記憶のないＡｚｕｒｅは知らないのだろうが、この街はかつて戦場だった。いや、戦争において一方的な空襲によって破壊された街だった。戦争以来見捨てられたこの街には、未だにああいった瓦礫の山が残っている。ほとんどが空襲によって破壊された家屋の残骸だ。
かつて轢が家族と共に住んでいた家も、あのような姿に変わり果てているのだろう。そしてゆっくりと、朽ち果てていく。

「いいものって、あれか？」
「ううん、違う」
Ａｚｕｒｅはさらに轢の腕を引っ張った。
「見て、そこ」
「……？」
Ａｚｕｒｅに引っ張られるまま数歩あゆみ、瓦礫の前で足を止めた。
「そことそこの、間」
指し示されるまま、コンクリートとコンクリートの間を覗き込む。ちょうど瓦礫が覆いになっていて、中はとても暗い。
「なんか、土から生えてるでしょ」
「……ああ！」
しゃがみこんで眼を凝らした轢は心からの嘆声をあげた。それは名もなき雑草――。
「これ、何ていうの？　クサとかキじゃないよね？」
好奇心に眼を輝かせているＡｚｕｒｅに向き直り、轢は微笑んで見せた。
「これはな……」

――「花」っていうんだ。

この街に花など咲かない。戦争が終わって随分経つ今でも、死の雨は延々と降り続いているから。それは世界規模で起きている現象ではあるけれど、この街は特に汚染がひどいという。戦場となった場所の、宿命だ。
「それなのに……」
こんな場所でひっそりと、花が咲いていた。まるでこの地で散った命を悼むかのように。
「……」
黙りこんだ轢を、心配そうにＡｚｕｒｅが見つめていた。

「轢？」
「……そういや」
轢は立ち上がり、灰色の空の向こうを眺めた。方角は――かつて彼の家のあった場所。胸元に垂れ下がる十字架のペンダントを握り締める。
「……そういえば、家族の墓に花なんて持ってったことねえなあ。墓っていったって、単に家の跡ってだけなんだけどさ。こんな風な、瓦礫の山で……そこで過ごした記憶も、ほとんど残ってないし」
「轢」
不意に呼びかけられ、轢は振り返った。
「何だ？」
Ａｚｕｒｅは静かな表情で轢の胸元を指差す。
「轢がいつも首にしてる、それ」
「……ああ、これか？」
首に掛かったペンダントを掲げて見せると、Ａｚｕｒｅはうなずいた。
「それ、お墓と同じ形だよね」
「ああ……これは、墓の代わりだからな」
轢は飾り気のないその表面に、指先を滑らせる。――顔も思い出せない家族をせめて追悼するために、彼はずっとこの十字架を持ち歩いている。
「もしかして……あの場所にも咲いているかもしれないな」
きっと咲いている。そう思い込もうとした。
「こんな花が……ひっそりと」
誰に知られることもなく、彼らの死を悼んで――。
「そうだね」
Ａｚｕｒｅが不意に同意した。轢は弾かれたように彼の顔を見る。珍しく大人びた表情で、Ａｚｕｒｅは轢を見つめ微笑んでいた。力を抜いた、自然な笑み。
「きっと、咲いてるよ」

「……」
轢は何も言わず頷いた。何も言う必要がなかった。
「轢」
Ａｚｕｒｅはサングラスを掛け直し、改めて轢に向き直った。口元は微笑んでいたけれど、そのときの彼の本当の表情は分からなかった――後に轢はこのときのことを、そんな風に思い出す。
「僕のお墓にも、花が生えるかな」
「何言ってんだよ」
轢は軽くいなそうとするが、Ａｚｕｒｅは繰り返して言った。
「生えると思う？」
「……」
轢は一瞬言葉に詰まったが、やがて微笑んだ。
「そうだな」
きっと生えるだろう。世界で一番綺麗な、青い青い花が……。
――俺はそれを……眼にすることになるのだろうか。
軽く身震いした轢の手を、Ａｚｕｒｅが握る。
「行こう」
「……ああ」
轢は強く強く握り返した。
どんな戦争にだって、
どんなに放射能にだって、
手折れぬ花が、ここにあった。

轢の傷は順調に癒えた。追っ手の姿はまだ見えていない。
もう何も悪いことなどおきないのではないか。轢は漠然とそう思っていた。このまま二人で助け合って生きていけるのではないかと……友達として、もしかしたら家族としても、手を差し伸べあっていければいい。
ある日、マオから連絡があった。義理の兄がここから随分離れた場所で農場を経営していて、人手が足りないので手伝ってもらえないかと頼まれたのだという。
マオはこの街を離れる気がないというが、轢はその話に心を動かした。この街から遠く離れられるというのなら、願ったりかなったりではないか。Ａｚｕｒｅを探している者たちも、まさか追いかけては来ないだろう。ようやく安息の地を手に入れられる。
――マオの代わりに、自分たちが手伝わせてもらえないだろうか。
マオも元々そう提案するつもりだったのだろう、轢の頼みを快く引き受けてくれた。記憶喪失の青年と、マオと違って兄弟すらいない孤児。あまり望ましい人材ではないだろうが、好意的な彼の言葉が功を奏したのか、義兄は彼らを雇うことを承諾してくれたらしい。先日の手紙には農場のある街までの切符が二枚同封されていた。
そこは列車で二日ほどかかる場所で、轢はすぐに行くことを決めた。
「もう少し、頑張れよ」
マオの言葉が嬉しい。
――灰色のこの街に、俺たちの居場所はなかったけれど。
「遠くに行くの？」
Ａｚｕｒｅは相変わらずの無邪気な様子で轢に尋ねた。ホットドッグを食べながら、手についたケチャップを丁寧に舐め落とす。そ

の赤に別の色を重ねて悪寒が走り、轢は慌てて目を逸らした。まさかＡｚｕｒｅのその手が人を殺したなどと……轢にはまだ信じられない。
「ああ、そうだよ」
彼らが今腰を下ろしているのは広場のベンチで、その金属のパイプ部分には赤黒い錆が浮いていた。街の他の部分と同じように、このまま朽ちていくのだろう。
「いつ出発？」
「明後日かな」
Ａｚｕｒｅはその黒いサングラスの向こう側から青い瞳を覗かせて微笑んだ。
「僕たち、一緒に行くんだよね？」
「ああ、もちろん」
「うん」
嬉しそうにＡｚｕｒｅは足をぶらぶらさせる。
「ねえ、どんなところ？」
「農場。果樹園って言ってたかな……」
「カジュエン？」
「ぶどう畑をやってるって聞いた気がする」
「僕、ぶどう好き」
轢は小さく噴き出した。
「食ったら話にならねえだろ。売りものなんだから」
「あ、そっか」
Ａｚｕｒｅは広場の中央、壊れた噴水の方へとその視線を投げた。コンクリートの破砕された欠片だけが転がるそこには、白や灰色のハトが群がっている。破裂した水道管から今もまだ湧き続けている、僅かな水を飲んでいるのだろう。
何故、この街にいつまでもとどまっているのだろう。彼らの背中には翼があるのに。どこにでも好きな場所に飛んでいけるはずなのに。

それとも、彼らにはここを離れられない理由でもあるのだろうか。
「ごめんね、轢」
Ａｚｕｒｅがぽつりとつぶやき、轢は驚いて彼を見つめた。その表情に色はなく、青い瞳には暗い影が落ちている。
「何がだ？」
「僕のせいで、そんな遠いところに行かなくちゃいけなくなった」
「……」
「僕がいなければ、轢はこのままずっとここに居られて」
「……」
「誰にも追われることなんてなくって」
次第に俯いていくＡｚｕｒｅ。肩が細かく震えていた。
「怪我もしないで済んだのに……」
「Ａｚｕｒｅ」
轢は強い調子で彼の名を呼んだ。
「俺は」
拳をぎゅっと握り締め、轢は言う。
「俺は……」

――バサバサ……！！

ハトが羽ばたいた。一斉に空を目指して飛び立ち、灰色の中に見る見る溶け込んでいく。
「俺は……」
轢は茫然とその群れを見つめていた。
ハトは、飛んだ。彼らは翼を持っているのだから――どこへだって行ける。
Ａｚｕｒｅの青い眼は涙を湛えている。手を伸ばして彼の金髪に触れると、びくりと体を震わせた。柔らかな髪をそのままくしゃくしゃにかき乱す。
「俺は、ぶどう園が見たい」

「え？」
Ａｚｕｒｅがきょとんと彼を見返す。その拍子に、涙がひとつぶ――零れ落ちた。
轢は空を仰ぎ、ハトの群れを見つめる。
「こんな廃墟みたいな街より……、緑に囲まれた農園に行きたい」
マオが言っていた。向こうには「空」があるのだと。ここのような灰色の空ではなくて、ちゃんと「空色」の空があるのだと。

きっとその場所こそ――俺たちが生きるにふさわしい場所だろう。

「俺たちは、どこへだって行ける」
轢はつぶやいた。
「どこでだって生きていける」
轢はＡｚｕｒｅを見つめた。
「一緒に来るだろう？」
「……いいの？」
「来たくないのか？」
Ａｚｕｒｅは首を左右に振った。
「……いきたい」

行きたい。

生きたい。

轢は微笑んだ。
「じゃあ、いこう」

信じていた。
この灰色の空の向こうに、未来（あす）があることを。
まるで祈るような心地で、

信じていた。

この街で過ごす最後の夜。轢は部屋中のものを集め、鞄に詰めていた。大きな家具はマオに処分を頼んでいる。もっと大きくなるかと思った荷物だが、大きなボストンバッグふたつで十分だった。

「荷物……こんだけか？　少ないなあ」

轢はつぶやくが、やがて思い直してうなずく。

「まあ、元々Ａｚｕｒｅなんて何にも持ってなかったんだもんな。俺も身軽な方が好きなたちだから、私物ってあんまり持ってないし……」

轢はふと気付いて辺りを見回した。Ａｚｕｒｅがいない。

「あいつ、俺にばっかり荷造りさせて……何やってんだ？」

首をひねりながら――ふと気付く。部屋に漂う食欲を刺激する匂い。これはまさか……。

「おい、Ａｚｕｒｅ！」

壁の向こうから返事が届いた。

「なに？」

「……お前、何やってんだ？」

返答の予測はついているが、敢えて尋ねてみる。

「何って……夕飯作ってるんだよ。轢、片づけで忙しそうだったし」

――やはり。轢はごくりと唾を飲んだ。

「気持ちは嬉しいが……味に、自信はあるんだろうな……？」

「大丈夫、轢に教えてもらったとおりにやったから」

自信満々な様子のＡｚｕｒｅ。轢はテーブルの置かれた部屋へと向かった。既にＡｚｕｒｅが皿を並べている。皿に盛られているのはポトフとガーリックトースト。とりあえず、匂いに特に問題はなく、見た目も悪くはなかった。轢は注意深く観察し、ひとまずほっと安堵する。

「今のところは合格だな」

「荷物の片付けは終わった？」
「ああ、ほとんどな。とりあえず、メシにしようぜ」
この席に着くのも今夜が最後だ。轢は感慨深げに部屋を見回す。
「いただきまーす」
Ａｚｕｒｅにわずかに遅れ、轢もまた手をあわせた。
「いただきます」
湯気を立てるポトフを、おそるおそる一口。ほっこりとじゃがいもがくずれた。
「あ。うまい」
「ほんと？」
轢はトーストをかじった。さっくりとした食感、ガーリックが香ばしい。
「お前、これはすごい進歩だぞ。犬が二本足で立ってバク宙するくらいすごい」
「バクチュウ……？」
不思議がるＡｚｕｒｅを、轢は口いっぱいに頬張ったまま促した。
「ほら、Ａｚｕｒｅも見てないで食えよ。あったかいうちの方がうまいぞ」
「うん！」
轢に褒められたのがよほど嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべて食事をするＡｚｕｒｅ。ふと、轢の胸がざわついた。そういえば、Ａｚｕｒｅがひとりで料理をしたのは初めてのことだ。何故突然そんなことをしようと思ったのだろう……。
――Ａｚｕｒｅは予感していたのかもしれない。
自分の身に振りかかる、運命を。

VOYAGE

――この街を離れる日が来た。轢とＡｚｕｒｅは連れ立ってマオの店を訪れる。これがもう、最後になるだろう。店にいた彼は二人を交互に眺め、穏やかに微笑んだ。

「行くのか」

「ああ」

轢は頷いた。

相変わらずＡｚｕｒｅの手は轢のシャツのすそを引っ張っていて、そのためにすっかりその部分は伸びてしまっていた。けれど、彼にはそうしていなければならない理由があるのかもしれない。――そうでもしなければ轢の側にとどまれない、そんな理由が。

「そろそろ駅に向かわないと」

「夜行列車だったな」

「ああ」

轢は清々しい顔をしていた。この街での生活に未練はないのだろう。確かに、轢はこの街には似合わない。彼はこんな灰色に埋もれた街ではなく、もっと光の溢れた明るい場所で、伸び伸びと生きていくほうがいい。

「荷物もこれしかないし」

轢は足元のボストンバッグをふたつ、掲げて見せた。

「身軽なもんさ」

「大きな荷物があるじゃないか」

マオがＡｚｕｒｅの方を視線で指して見せると、轢は笑った。

「いいんだ、これは」

「何の話？」

Ａｚｕｒｅがその青い眼をきょとんとさせて轢とマオを見比べる。

「気にするな」

「うん」

Ａｚｕｒｅは素直に頷き、にっこりと微笑んだ。
「僕、ぶどう楽しみだな」
「そうか」
マオは子供っぽい彼の仕草に笑みを零す。得体の知れない男だという警戒感も、この笑顔の前ではかすんでしまう。ただ、Ａｚｕｒｅは無知で純粋なだけなのではないかと、マオは思った。だからこそ、自分や轢に害をなすものをただ単純に排除してしまったのだろう……。
「感謝してるぜ、マオ」
轢は右手を突き出した。マオはその手をぎゅっと握る。
「Ｂｏｎ　ｖｏｙａｇｅ」
かつて覚えた異国の言葉が、彼の口から零れ出た。――どうか彼らの前途に幸がありますように。店を出て小さくなっていく二人の背中を、マオはただじっと見送っていた……。

彼らが駅に着いた時には、列車が来るまでまだ随分余裕があった。彼ら以外に乗客の姿はないが、もっと時刻に近づいたら増えるのかもしれない。
風に髪をなぶられるまま、彼らは木のベンチに腰を下ろした。壊れないかとびくびくしたが、意外に頑丈なようだ。
轢は空を見上げて吐息をつく。
「この街を離れるなんて思ってもみなかった……」
「本当は行きたくない？」
Ａｚｕｒｅが眉を陰らせて尋ねた。轢は笑って否定する。
「違う。多分俺は……ずっと、遠くに行きたかったんだ」
「遠くに？」
「ああ」
眼を細めた。
「ただ、一人では行く決心がつかなかった。それだけさ」

「……」
「だから、お前と会えて良かったよ」
「……うん」
Ａｚｕｒｅはそう言って微笑んだ。
もう金髪を隠すニット帽も、碧眼を覆うサングラスもない。さらさらと流れる光は少し赤みの差した白い頬に零れている。薄ぼんやりとした陽光を受けた青い瞳は澄んだ水のような色を湛えていた。
――不思議な色だ。
轢はその瞳をまじまじと見つめる。この色をどう形容したらいいのか、彼にはわからない。純粋で美しい、しかしどうかするとすぐさま濁ってしまいそうな危うさを持つ……この色をどうしたら守れるのだろう。
――だが、こいつは人を殺した。
轢はぎゅっと拳を握った。冷たい汗を背中に感じる。あのことを、忘れたわけではない。人を「殺した」といわず「壊した」というＡｚｕｒｅ。人には代わりがあるのだと、予備が用意されているのだと、当たり前のようにそう語った。

Ａｚｕｒｅのことは良く知っている。
彼が好きな色は白。好きな食べ物はシチューや甘いもので、緑の野菜は嫌い。いつもきょろきょろしていてふらふらと歩いていくが、そのくせ轢の姿が見えないと大慌てで探し回る。甘えん坊。動物好きらしく、野良犬や野良猫とすぐに仲良くなる。気が合うのだろう。
けれど……。
Ａｚｕｒｅのことは何も知らない。
彼がどこで生まれたのか、どうやって育ったのか。どうして記憶をなくしたのか。誰に、どうして追われているのか……。

「轢？」
黙りこんだ彼を不思議に思ったのか、Ａｚｕｒｅは轢の額に軽く触れた。汗ばんでいる。
「どうしたの？」
「……どうもしない」
その手をそっとつかむ。細い白い指はひんやりとしていた。
「お前は……」
轢はぽつりと呟いた。
「どこから来たんだろうな」
「え？」
「俺は、ずっとひとりで生きていけると思っていた」
家族の思い出などない。仕事を共にする仲間はいても、人生を共にする相手はいない。そう思っていた。恋人に殺されて金を奪われた事件など、ありふれている。友人に裏切られたものも数知れず見てきた。あの街で他人に迂闊に心を許せば、それはすなわち死を意味する。轢がマオを信頼しているのはそれだけの理由があってのことで、彼のような存在は例外なのだ。
「けどさ」
轢は照れたように笑ってＡｚｕｒｅを見やった。
「なんか……、お前がいるのが当たり前になっちゃったよ」
「……」
「お前は俺の友達で、たぶん家族のようなもので……だから」
――だから……。
「お前は……お前はずっとこのまま」
「うん」
突然の声に驚いて、轢は言葉を途切れさせた。目の前でＡｚｕｒｅが微笑んでいる。
「そうだね」
「……」
「このまま……一緒に」

「……」

――だから……、

カツ、と固い音が響いた。轢はびくりと顔を上げ、音のした方角を見遣る。そこに佇むのはグレイのスーツを着た男だった。年齢は轢よりもずっと年上だろう。シルバーフレームの眼鏡をかけていて、表情は良く見えない。ただ、その視線が彼らに向けられていることは明らかだった。

「困った子だ」

低い声が、轢に不吉な予感をもたらす。

「Ａｚｕｒｅ」

側の彼がびくりと震えた。

「いい加減に帰って来い。渚が死んでしまう」

「……」

Ａｚｕｒｅの手が轢のシャツのすそを握り締める。

「……僕はあんたを知らない」

小さく、それでもはっきりした声で彼は言った。

「だから僕は、どこへも帰らない」

「……記憶をなくしたというのは本当だったわけか」

男はやれやれ、というように首を横に振った。

「どこまでも手を掛けさせるやつだな、お前は」

「……ナギサってのは誰だ」

轢が押し殺した声で尋ねた。男は興味もなさそうに彼を見遣る。

「お前がＡｚｕｒｅの飼い主か？」

「……飼い主じゃない」

轢は立ち上がった。Ａｚｕｒｅを庇うように一歩前に出る。

「友だちだ」

FOR YOU

男は面白がるように口元の片方を歪めてみせた。
「友だちねえ？」
そこに煙草を加え、ライターで火をつける。
「これは面白いな」
「何がだ」
男はゆっくりと口を開いた。
「Ａｚｕｒｅは、人間じゃない」
「……は？」
轢は間抜けな声を上げた。
「何言ってんだお前」
男は手に挟んだ煙草で宙に円を描く。
「生物学的には人間だ。だが、社会的には違う」
「……」
振り向くと、背後のＡｚｕｒｅも眉を顰めている。男の言うことが理解できないようだ。
男は肩をすくめた。
「Ａｚｕｒｅは『代わり』なんだよ」
「『代わり』……？」
轢ははっと眼を見開く。Ａｚｕｒｅのこだわっていた、「代わり」という言葉。まさかここで聞くことになるとは思わなかった。
「そう。Ａｚｕｒｅは渚という男の『予備』として作られた」
Ａｚｕｒｅの手が静かに震え出す。
「平たく言えば、Ａｚｕｒｅは渚のクローンなのさ。クローンとい

うものを聞いたことくらいはあるだろう？」
「……」
轢は絶句した。男はＡｚｕｒｅを見据えた、話を続ける。
「渚は生まれたときから重い心臓病を患っていてね。心臓移植用にと作られたのがＡｚｕｒｅだ。その眼、識別のためにわかりやすく色をつけたもの。それなのに……」
わざとらしく嘆息する。
「うちの馬鹿な研究員の一人がＡｚｕｒｅに情を移し、大金を持たせて逃がした。おかげで俺たちは大目玉を食ったよ。おまけにこの間は三人もスタッフが死んだ。ま、Ａｚｕｒｅが見つかったわけだから良しとするが」
「……つ、つまり」
轢はようやく声を絞り出した。ようやく思考が意味を成し始める。耳の奥がどくどくと響いて、うるさかった。
「Ａｚｕｒｅは殺されて……心臓を取り出されるっていうのか？！」
「そういうことだな」
男はこともなげに頷いた。轢は叫ぶ。
「そんなこと、許されるわけないだろ？！　クローン人間なんてずっと前から禁止されてるはずだ！」
「知っているさ」
「だったら何で……！」
「金持ちは裏で何だってできる。特に戦後はそういう世界になったのさ。わかるだろう？」
「くそっ……」
轢はギリッと歯を食いしばった。
――そんな、馬鹿な。
男は先ほどから右手をポケットに入れている。恐らくあそこには拳銃があるのだろう。あれで脅されたら――万事休すだ。何とかし

なければ。何とかして、Ａｚｕｒｅを守らなければ……！
「説明は一通り聞いたな。もういいだろう？」
男はゆっくりと右手を突き出した。思ったとおり――その手には拳銃が握られている。
「Ａｚｕｒｅ、帰って来い」
「……」
Ａｚｕｒｅは唇を噛み締めていた。下唇は色を失って白くなっている。
「渚が死ぬと困るんだ」
「俺たちの知ったことか」
男は轢の言葉を鼻で哂(わら)った。
「お前には関係ないだろう、おせっかいな坊や？」
「あるさ」
「……」
男が片眉を上げた。轢はきっぱりと言い切る。
「俺たちは、友だちだから」
「……」
それを聞いて、彼の口元が緩んだ。
「なるほど」
銃口をゆっくりと轢に向ける。
「それではＡｚｕｒｅ。お前が帰ってこないとオトモダチが死ぬぞ？　それでも帰らないというのなら、好きにするがいい」
「なっ……！」
「ダメ！！」
轢の声を遮るようにＡｚｕｒｅが叫んだ。
「僕行く！　帰るから！」
「Ａｚｕｒｅ？！」
「轢を殺しちゃダメ！」

信じられない力でＡｚｕｒｅが轢を押しのけた。青い眼にいっぱいの涙を湛え、彼は男に駆け寄る。
「僕が帰ればいいんでしょう？　だから、轢は……」
「ああ、そうだな」
男は頷いた。
「ま、待て！！」
轢が駆け寄ろうとするところに再び銃口が向けられる。男の手はＡｚｕｒｅの腕をしっかりと掴んでいた。
「それ以上近寄るな。お前のようなストリートチルドレンが殺害されたところで、誰も何も騒がない。……便利な世の中だな、まったく」
「……」
轢の視線の先でＡｚｕｒｅが微笑み、涙が一筋、頬を流れた。
「……ごめん」
「……Ａｚｕｒｅ、」
「僕、一緒に行けなくなっちゃった」
轢はただ立ち尽くす。
「ごめんね……」
男の視線がついと横を向いた。物陰からもう一人、今度は黒いスーツを着た男が姿を見せる。その手にも拳銃が握られていた。その銃口は真っ直ぐに轢を向いている――。
「轢！！」
Ａｚｕｒｅは悲鳴を上げた。轢はただ呆然と、その暗い穴を見つめている。
――何で……何で、俺たちは、ただ……。
「お前が帰ってきたら殺さない、なんて俺は一言も言っていないぞ」
口封じが必要だと笑う男を、Ａｚｕｒｅは思い切り突き飛ばした。

「轢！！」

――俺たちはただ、信じていたかった。

こんな俺たちにも未来があると、
灰色の空の向こうに本物の空があるんだと、
ただ、信じていたかった……それだけだったのに。

――パァン……！！

その音を、轢はひどく遠くで聞いた。

BLUE　SKY

一緒に行こう。
俺たちの未来へ。
……一緒に。

「しまった！」
男の大声が耳に響いた。轢は瞬きを繰り返す。――彼の腕の中に、ずっしりと熱い何か。
「Ａｚｕｒｅ！」
それはＡｚｕｒｅの体だった。轢の肩に彼の金髪が埋まる。
「きし……る……」
「Ａｚｕｒｅ……」
轢はぞっと彼の背中を見つめた。彼の羽織っていたコートが、真っ赤に染まっている。
心臓の近くだ。もう移植はできない……手術に使えない。そんな男たちの台詞を、轢は聞くともなしに聞いていた。
「あ……Ａｚｕｒｅ」
Ａｚｕｒｅはゆっくりと顔を上げ、轢を見つめた。そして、微笑む。
「……大丈夫？」
「Ａｚｕｒｅ……」
轢はがくがくと頷いた。顎が震えて、歯が噛み合わない。
「僕は、ダメかもしれない」
痛そうに眉を顰め、それでも口元は穏やかな円弧を描いていた。
――なんで、笑ってるんだ。轢は歯を食いしばる。
「なんで……なんで……」

問いとも何ともつかない轢のつぶやきに、それでもＡｚｕｒｅは答えた。視線を軽く彼から外して、
「轢は、特別だから……」
――轢に、「代わり」はいないから。

「ち……、」
轢は呻いた。
「違うだろ……！」
「え？」
Ａｚｕｒｅが聞き返す。
「お前だって……お前にだって『代わり』はいねえだろ……？」
力が抜けていくのか、Ａｚｕｒｅの体が徐々に重さを増していく。
轢はずるずると座り込み、しかし彼の体を離すことはなかった。
「お前だって……特別だろ……？」
泣いた。どうしようもないほど悲しくて、轢はぼろぼろと泣いた。
「泣かないで……」
Ａｚｕｒｅの手が轢の頭を撫でる。
「僕は……いいんだ、これで……」
「何が、いいんだよ」
上手く言葉にならない。
「なんで……こんなの、一緒に行こうって……約束……したのにっ……！」
「ごめんね……」
轢はＡｚｕｒｅの薄い肩を抱える。そうしている間にも、Ａｚｕｒｅからは少しずつ熱が零れていた。
「轢……」
Ａｚｕｒｅが、彼の名を呼ぶ。
「僕がいなくなっても……轢は、行ってね。ぶどう園」
「ひとりで行けって……いうのかよ……」

「ううん」
Ａｚｕｒｅは首を横に振った。轢の見慣れた、茶目っ気を含んだ表情で見上げてくる。――だが、その唇からは一筋血が垂れていた。
「あのね」
まるで秘密を打ち明けるような口調で、
「あそこには、『青い空』があるんでしょう？」
そう尋ねる。轢が曖昧に頷くと、Ａｚｕｒｅは嬉しそうに笑った。
「僕の名前はね……」

――「青い空」って意味だよ。

「だから……」
Ａｚｕｒｅの眼が涙に滲む。
「だから……」
轢は声もない。ただ黙って、Ａｚｕｒｅの失われていく体温に慄（おのの）いていた。
――ゆらゆらと彷徨っていた青い瞳が、焦点を失う。
「……僕は『代わり』として生まれたけど」
薄い唇が血で濡れていた。
「でも、そうじゃないって」
――轢がそう言ったから……。
「誰かの『代わり』じゃない轢がそう言うから、きっとその通りで」
――轢は特別だから……。
「だから……轢のための『代わり』になら、なってもいいんだ……」
――見も知らぬ男のために死ぬよりは、ずっといい。
満足げな笑み。それが青ざめていくのは、血がどんどん零れ出していくからだろうか。どうしたらそれを止められるのか、轢にはわからない。どれだけ自分が祈っても、やはり聞き届けられることはないのだ。足元から凍りついていくような、冷たく暗い絶望感が轢を包む。

――それでも、
「……Ａｚｕｒｅ」
轢の唇が、ようやく言葉を生んだ。このままでは間に合わない……Ａｚｕｒｅに届かなくなってしまう。
「ごめん……」
頭が割れそうなほど痛む。
「ごめんな……」

お前を守れなくて、
お前のその瞳を守れなくて、

「ずっと、友だちでいたかった……」
「……うん」
Ａｚｕｒｅはまるで轢を泣き止ませようとするかのように、何度も彼の肩をたたいた。
「お前と一緒に……」

――「青い空」を見たかった。

「お前の瞳と同じ色の、青い空のある場所へ」

――お前を連れて行ってやりたかった。

「……行くよ」
Ａｚｕｒｅはそう言って手を伸ばした。血に濡れた手が、轢の胸元に触れる。
「僕はずっと……ここに」

轢の思い出の中に。記憶の中に。
誰の「代わり」でもない、Ａｚｕｒｅというひとりの人間の生き

た証として、生き続ける。

「必ず、見に行ってね」

Ａｚｕｒｅは囁くように轢に告げた。

「『青い空』が、」

轢を待っているから。

僕は、轢を……待っているから。

「Ａｚｕｒｅ……」

轢は言葉を飲み込んだ。ぽたり、と――Ａｚｕｒｅの手が、地面に落ちる。

――その「青い空」は、二度と光を宿さない。

EPILOGUE

正午を告げる鐘が響く。轢はかがめていた体を起こし、大きく伸びをした。足元の籠にはぶどうが山盛りになっている。

「轢」

呼ばれて振り向くと、そこにはマオの義兄、シェンがいた。優しく微笑んで轢を手招きする。

「休憩にしよう。おいで」

「はい。……あ、すみません、俺ちょっと寄って行きたいところがあるんですけど」

シェンはうなずく。

「……彼のところだね。わかった、先に行っている」

「すぐ行きます！」

轢は小高い丘を駆け上っていった。その頂上には、小さな杭が刺さっている。いつも轢の首元にあった十字架のペンダントが掛けられて、風にゆらゆらと揺れていた。

轢は微笑み、優しく語りかけた。

「今日もいい天気だな……Ａｚｕｒｅ」

答えるのは、風。

農作業には、ようやく慣れた。彼を迎え入れてくれた家族はとても暖かく、居心地がいい。きっと轢が再び笑えるようになったのは、彼らのおかげだろう。親友を亡くした。ただそれしか伝えられなかった轢を気遣い、慰め、励まし――すべてが轢の傷を優しく清めてくれた。

しゃがみこみ、轢は杭を優しく撫でた。――まるで、Ａｚｕｒｅの髪を撫でたときのように。

「ここはいい場所だろ。シェンさんがくれたんだ。……『青空』も、近い」

しかし、Ａｚｕｒｅの遺体はここにはない。あの後、茫然として

いた轢が我に返ったときには、既にＡｚｕｒｅを追ってきた男たちも、Ａｚｕｒｅの体も、どこにもなかった。すべては最初からなかったかのように……。

――違う。

轢は首を横に振る。

――俺は確かに覚えている。青い目をした、儚い友情と希望を……。

――本当は、この青い空の下に埋めてやりたかった。

「また、来るからな」

轢は立ち上がると、墓に背を向けた。まるで彼を見送るかのように、風に吹かれた十字架が杭とぶつかって音を立てる。

――あの墓は、俺の家族のものだ。幼い頃に亡くした俺の家族と、そして、ほんの少しの間だったけれど、家族のように過ごしたＡｚｕｒｅの……。

シェンは裏庭で轢を待っていた。

「もういいのか」

轢はうなずく。

「はい。……今日もいい天気だなって」

風が吹き抜けていく。若草の上を、さざなみのように。

「ああ、そうだね。いい風が吹いている」

シェンの言葉に、轢は微笑んだ。

薄曇りの空から、不意に日が差し込んできた。轢は眼を軽く手で庇いながら、空を見上げる。降り注ぐ光がまるで天国から降りてきた階段（きざはし）のように、彼らを照らし出していた。

「ああ……」

思わず洩れた、感嘆の声。

――綺麗だ。
隣に並んだシェンも、つられたように振り仰ぐ。
「こんな空の色は、まだあの街では見られないのか」
「……見られません」
轢は独り言のように呟いた。
「俺は――あいつに会うまで、見たことがなかった……」

灰色の雲の向こうにあった、青い空の存在を教えてくれた君に。
もう二度と会うことのない君に。
この青い空を、

「見せたい……」

最後の鐘の音が、響き渡って消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5222z/

Fool'sParadise

2011年12月17日19時53分発行